大谷大学広報

編集　大谷大学広報編集委員会

No.169

2006年11月７日

2006 秋

学園祭に向けてのイベント会議

私の映画○○部門特別賞

学問のしおり
Tomorrow, and Tomorrow, and Tomorrow「空過」
井上　尚実

国際交流トピックス

2006大谷大学紫明祭

谷大エリア散策
京都小山西花池郵便局

写真でふりかえる大谷大学今昔
大谷大学と鈴木大拙

SQUARE
世界人、大拙の英文の墨跡
礪波　護

冬扇

日本という国は、知らず知らずのうちに、厳しい競争社会になってしまったのではなかろうか。競争社会を勝ち抜くために、子どもたちは小学生の時期から塾通い。友達は友達であると同時にライバルとなってしまったようだ。ライバルに勝つためには、排除の論理が必要になってくる。負け組を作り、自分自身が勝ち組に入らなければならないのだ。勝ち組になるために、努力するというプロセスよりも「勝つ」という結果が重要になってしまったのではなかろうか。私達は子どもたちに「がんばれ、がんばれ、そしてライバル（友達）を蹴落とせ」と伝えているのかもしれない。

ところが､不思議なことがある。これだけ早い時期から塾通いをして熱心に勉強しているにもかかわらず、子どもたちの学力は低下しているとのことである。一体どうなっているのだろう。

かつて、私達が子どもの頃、親は子どもに、人に対する「思いやり」と「やさしさ」を教えたものだった。そのことは、人は競争の中で『育つ』のではなく、「思いやり」や「優しさ」に包まれた仲間集団の中で、はじめて『育つ』ということを意味しているのではなかろうか。

（徳岡　博巳）

私の映画○○部門特別賞

映画好きも高じると、ちょっと人が見ていないような作品を見て「なかなかよかったよー」とか、メジャー作品でもほかの人が注目しないようなところに着目して「あそこの○○がいい味出してる」とか言ってみたくなるのでは。今回はそんな映画マニア魂に火をつける特集です。

私もひとつ。名作『ティファニーで朝食を』の中で主人公のホリーが飼っている名無しの猫。ちょっとおデブで愛嬌があるだけでなく、名前を変えて誰のものにもならないホリーの分身のような存在。彼（彼女？）がいなければこの映画の印象は大きく変わることでしょう。ラストの絶妙なタイミングで振り向く演技も冴えてます。なので「助演にゃんこ部門特別賞」に勝手に決定！！

『マザー・テレサ』
ー心に残る人物部門特別賞ー

七尾　あゆみ

『マザー・テレサ』（2005年・ファブリッツィオ・コスタ監督）。世界的にも名の知れた彼女の生涯を描いた映画である。スクリーンに映し出される彼女の人生はほんの一部にすぎないのだろうが、彼女の生き様を通してそこから学ぶべきことや考えさせられることが多くある。

この映画では36歳から87歳に至るまでのマザー・テレサを描いている。彼女を取り巻く環境が心境に大きな変化をもたらし、マザー・テレサという一人の女性の人生を左右するのである。

カルカッタの修道院で生活していた彼女は、インドの中では恵まれた生活をしていた。しかし、家も無く誰からも看取られることなく亡くなる人々や貧しく物乞いをする人々を目にし、自分の中で大きな壁にぶち当たったのである。自分は修道女でありながらこのような人々に何もすることができない。私はこのままでいいのだろうかと自分が本当にすべきことを問うのである。そしてついに自分が生活してきた修道院を後にし、様々な苦しみを持つ人々に寄り添い、共に生きていく道を選ぶのである。彼女が下したこの判断はとても困難な道だったに違いない。教会や多くの人々から圧力を受け、多くの人の反対もあった。そんな困難にも負けず彼女は自らが信じた道を突き進み、多くの人々に愛を持って接していった。彼女は、共に協力し合う仲間たちと「神の愛の宣教者会」を立ち上げ、自らの意志で世の中が見捨てた人々を救うことに努めたのである。

マザー・テレサは次のような言葉を述べている。「この世の最大の不幸は、貧しさや病気ではありません。むしろそのことによって、見捨てられ、誰からも自分は必要とされていないと感じることです。」誰もが分かっているようで、一番分かりにくいことだと私は思う。このような言葉はそう簡単に言えることでもなければ理解できるものでもない。しかし、厳しい現実と環境が生み出した孤独という問題を誰よりも深く捉え、真正面から向き合っていくべき問題であるとマザー・テレサは伝えたかったのではないだろうか。人は孤独の中では生きていけない。人間によって孤独が生み出されているのであれば、同じ人間がその孤独を取り除いていくことしかできないのではないか。

マザー・テレサの勇気ある行動と愛によってどれほど救われた人がいるだろう。彼女の手で孤独と戦う人々がどれだけ希望を与えられたのだろう。マザー・テレサは人々にとって本当に大切なものを、そしてこれから私たちが考えていかねばならないことを教えてくれたのではないかとこの映画によって感じることとなった。

（ななお　あゆみ
真宗学科第４学年）

ロマンチック物語部門特別賞

エリザベス・ティンズリー

この文章を書き始める前、自分はロマンチックな映画なんてそんなに好きではないと思っていた。しかし、改めてどんな映画が好きか、その映画のどんなところに感動して大切と感じたのか、ということについて考えてみると、愛着・献身、そして別れと再会が表現されるところが一番好きであることが分かってきた。それはある意味で、完全にロマンチックなことなのに、ハリウッドラブストーリーのような愛の表現ではないかもしれない。

10年前に初めて見た『Paris, Texas』(1984年・Wim Wenders監督)は男とその家族の愛についての物語である。監督のWim Wendersはアメリカの広大な風景がとても好きで、彼の映画はよくその広漠とした地域の不思議な美と寂しさを切り開いている。そして、彼が主な映画で使ったように『Paris, Texas』はアメリカ映画の模範的なロードムービーテーマを持っている。最初のシーンでは、テキサスの砂漠で一人の男がふらついて歩いている。主人公のテュラビスは会話ができず、記憶喪失者である。テュラビスを助けた人は彼の兄を捜し出す。テュラビスはその兄の協力を受けながら日常生活を送り、少しずつ自分の過去の出来事をたどり始める。そして、過去に自分のもとを去った妻を息子と一緒に探す旅路のなかで、父と息子の微妙な関係、葛藤を巧みに表している。この映画の魅力の一つは風景と感情の融合であると思う。とてもペースは遅く、映画を見る人は物語と一緒に風景をゆっくりと眺めることができる。

『Nuovo Cinema Paradiso』(1988年・Giuseppe Tornatore監督)は、『Paris, Texas』といくつかの共通点がある。これも一人の男が過去のことを回想していくストーリーである。

サルヴァトーレは幼い頃に父を失い、映画館で働いているアルフレードを父親がわりにして成長する。大人になったサルヴァトーレはアルフレードの葬式のために故郷に帰って、幼い子ども時代から10代の頃の出来事を知ることとなる。なによりもこれは、私にとって、初恋の崇高さと耐久性を表現する物語である。ちなみに、初恋の人との再会シーンはとても美しくて感動させられるシーンである。最高にロマンチック！

次に人生の辛さに直面するという重いテーマを扱っている映画を紹介したい。『Les Nuits Fauves』(『野生の夜に』)(1992年・Cyril Collard監督)はフランスの映画監督であるCyril Collardの実話である。これは人生と人間から別れ行くエイズ患者ジャンの、死に対峙する恐怖に取り組む話である。エイズをテーマにした映画・ドラマは幾つかある。たとえばアメリカの『Philadelphia』(1993年・Jonathan Demme監督)や日本の『神様、もう少しだけ』(1998年〈ドラマ〉)であるが、Collardの扱い方はそれらと随分違う。病気と闘うことの複雑性を赤裸々にした話である。そして、ジャンと彼を愛する女性の関係はその状況を背

CONTENTS

p. 2…私の映画○○部門特別賞
p. 9…CAMPUS☆TOPICS
p.20…学問のしおり
p.21…国際交流トピックス
p.27…2006大谷大学紫明祭
p.29…Keiji☆Ban
p.33…学生相談室から
p.34…谷大エリア散策
p.35…写真でふりかえる大谷大学今昔
p.36…研究室だより／学会だより
p.38…出版物紹介
p.39…大谷中学校・高等学校
九州大谷短期大学からのお知らせ
p.40…SQUARE

表紙のことば

半年前に発足した実行委員会
今までを否定するのではなく
「進化」した紫明祭を目指して
時にはぶつかり合い
多くの意見を交わしあった
出演者、来場者、そして実行委員
全ての想いが「三縁新花」の
テーマのもと
幾多の出会いと共に
まもなく結実する

冬扇

詳しくは「夏炉冬扇」という。夏の炉や冬の扇のように役にたたぬことの意味に用いる。ここでは役にたつたたないの次元をこえて一筋の道に生きる精神をあらわす。

2006年11月7日発行
発行　大谷大学企画室
編集　大谷大学広報編集委員会
〒603-8143
京都市北区小山上総町　大谷大学企画室内
電話（075）411-8115
FAX（075）411-8149

景にして発展する。この物語は「ロマンチック」とは言えないが主人公の人生への愛着、そして死に対する葛藤は私に深く感動をあたえ、忘れられない映画となった。

最後に、また家族の愛を表現した映画である。『Life Is Beautiful』(1998年・Roberto Benigni監督)の舞台はファシズム政権下のイタリアである。そこに幸せに暮らしていたユダヤ人グイドと息子のジョズエはある日、強制収容所に連行された。恐ろしい状態から息子を怯えさせまいと、グイドは息子に嘘をつく。強制収容所にいることはゲームで、得点を獲得すれば、ジョズエがお気に入りの戦車をもらえるという嘘。最後まで父は想像力を尽くして息子を守り抜く。監督のRoberto Benigniはこう言った「愛と想像力は不滅だという希望を失わない事が大切だ」。この四本の作品はそのようなテーマのある映画だと思う。ぜひ、一度見てください。

(エリザベス　ティンズリー
修士課程　仏教文化専攻
第１学年)

人生部門特別賞　ー映画は我が青春ー

岩崎　聰一郎

学生時代にテレビは無かった。ラジオは持っていなかった。私は映画マニアだったのだと思うが、友人たちは、そのことを誰も知らなかった。映画は１人でしか観に行かなかったし、自分自身だけに関わるものだと思っていたからである。

当時の私の映画の鑑賞法を紹介しよう。

(1) ストーリーの理解（初回に２回続けて観るから、この段階でだいたいはパスとなる）
(2) 台詞の理解
(3) 台詞と俳優の表情の納得
(4) 各シーンの背景の諸々を視覚と聴覚の両サイドから納得
(5) 自分なりの、作品に対する全面的な納得

以上のような段階が終わらないと、私にとって、１本の映画を鑑賞したことにならなかった。だから、下宿や大学で（授業中でも）納得できないところを発見すると、何はさておき、映画館行きとなった。

その例を思い出してみると、(3) 台詞と俳優の表情　では、『狂熱の孤独』(1953年・フランス・イヴ・アレグレ監督、ミシェール・モルガンとジェラール・フィリップ共演)。

メキシコ観光に来た金持ち夫婦の夫が伝染病で死に、その町は封鎖される。妻は、夫の財布が盗まれたことに気付く。一文無しになった妻は、ゴキブリが徘徊し扇風機の壊れた猛暑のホテルの一室で、夫の死体の首からネックレスをはずし、換金しようとする。その時のミシェール・モルガンの表情が、どうしても納得できず、映画館へ直行。

また、(4) のシーンの背景については、『道』(1954年・イタリア・フェデリコ・フェリーニ監督、ジュリエッタ・マシーナ、アンソニー・クイン共演)のラストシーンで、野獣のような、粗野で非情な旅芸人を演じたアンソニー・クインが、金で買い取ったあげく捨ててしまった知的障害を持つ女ジェルソミーナの死を知り、女の優しさに初めて気づき、真夜中の海浜で慟哭するシーンがあるが、この海浜のバックシーンが、どうしても男の涙と波とだけしか思い出せずに映画館へ直行。

こんな調子だったから平均すると１本の作品に４回ほどは映画館へ足を運ぶということになった。映画の上映期間は限定されていたからなかなか忙しい。それに、当時は、私の好きなヨーロッパの名画が、次から次へと日本にやって来た。

こうして私は、大学を8年間かかってやっと卒業ということになったのである。

でも、このことは、今日でも、まったく後悔してはいない。私は、映画から計り知れないものを学んだのである。そして、それは、私の生涯の宝となっている。

映画は、総合芸術だと思う。見る、聞く、という感覚を基底として嗅覚、触覚、味覚というものでさえ、俳優の台詞、表情を通して

表現できるのである。

私は、学生時代からずっと今日まで、小説や詩を書き続けてきている。詩や小説の表現方法の多くは映画から学ぶことができたのだ、と確信している。

だから、映画は私の青春であり、人生であるのだ、と断言できるのである。

（いわさき　そういちろう
修士課程　仏教文化専攻
第２学年）

セリフで魅せる映画部門特別賞

武市　萌

「飛ばねぇブタはタダのブタだ」

一言このセリフを聞いて、青いアドリア海を真っ赤な飛行艇で飛んでいく『紅の豚』（1992年・宮崎駿監督）に思い当たる人は多いだろう。しかし残念なことに、この有名なセリフは知っていても、『紅の豚』を最初から最後までちゃんと見たことは無いという人によく出会う。

セリフとは不思議なもので、たった一言のセリフがふらりとその映画を見に行くきっかけになることもあれば、またその一言で、かつて見た映画の全てをぱっと思い出させてくれることもある。そして一方では、先にあげた『紅の豚』のセリフのように、セリフだけが一人歩きをして、人々の間に入り込んでいる時もあるのだ。

『紅の豚』は数ある映画の中でも特に印象に残るセリフが多い、「セリフで魅せる」作品だろう。舞台は第一次世界大戦後のイタリア。飛行艇時代の地中海で誇りと女と金を懸けて、空中海賊と戦い、紅の豚とよばれた、一匹の豚の物語だ。

主人公の豚ポルコ・ロッソは、元は人間で、大戦中にはイタリア軍のエースパイロットだった。しかし友人の死や軍（戦争をする人間）への反感から、自らに魔法をかけ、自分の姿を豚へと変えてしまう。以後彼は、飛行艇でアドリア海の客船を襲う空中海賊を相手に気ままな賞金稼ぎとして日々を過ごしていたが…。

ジブリ作品としては珍しい中年の主人公であるポルコ。そのセリフはどれも本当のかっこよさを持っているのだが、ファシストが行き交う街で、愛国債権を買って民族への貢献をと薦める銀行員に、「そういう事はな、人間同士でやんな」と言ったりと、豚ならでは（？）のセリフはなかなか楽しい。そんな中で、戦争から自分一人が生きて帰ってきたことに対して向けられる、「いい奴は死んだ奴等さ」といった、人間のポルコを感じるセリフが、黒点のようにぽつんと浮かび上がってくる。

また、この作品を語るうえで欠かせない人物に、ポルコの幼馴染みでありホテル・アドリアーノの女主人、マダム・ジーナがいる。かつて３度飛行艇乗りと結婚し、３人を戦争で亡くした彼女のセリフには、複雑な意味を持つものが多い。ラスト近くでポルコに向かって彼女が言う「あなた、もうひとり女の子を不幸にする気なの？」というセリフだけが、彼女がポルコに直接言う、唯一の愛の言葉なのだが、「愛してる」という言葉を最後まで直接には言わないポルコとジーナの関係も観てもらいたい。

このほか、印象強いセリフを持つ作品を挙げるなら、『海を飛ぶ夢』（2005年・アレハンドロ・アメナーバム監督）があるだろう。

若くして海の事故で首から下が不随となった主人公・ラモンは、家族の手をかりて以後26年間、ベッドの上で過ごしてきた。その年、自ら命を絶つ決断をした彼は、人権支援団体と協力して死を合法にするため、弁護士のフリアの協力を仰ぐ。法廷へ出る準備を進める内に、ラモンとフリアは互いに惹かれ始めるが、ある日フリアは、ラモンの家で発作に倒れる。不治の病に侵された彼女はやがて自らも死を望み、ラモンの死を手伝う約束をする。

尊厳死の問題を取り扱った作品だが、同時に人によって異なる様々な形の「愛情」が、率直なセリフとなって映画の中を飛び交う。ラモンを死なせまいとする彼の兄、ラモンの世話を愛を込めて

続ける兄の妻。彼の尊厳死のことを知ってやって来たシングルマザー、次第に愛を深めていくフリア。その他様々な人の声が、ラモンのもとに集まっていく。そしてまた、「僕を本当に愛してくれているのは、僕を死なせてくれる人だ」というセリフに込められた、ラモンが求める愛情の形もあるのだ。

ラモンのセリフには、心からどきりとさせられる言葉が多い。「なぜいつも笑っているの？」と尋ねられて、彼が言う。「身動きをするにも人の助けがいる人間は自然に覚えるんだ。涙をかくす方法をね」と。序盤で、このセリフは観ている人間の意識を真っ直ぐに作品の中へ誘導してくれるだろう。

以上二つの作品を挙げたが、印象的なセリフを持つ作品は他にも沢山ある。力のあるセリフはそれだけで作品を見るきっかけを作ってくれるし、また何気ないセリフでも、自分の琴線に見事に触れてくることがある。意外と好きな映画、好きなシーンまでは同じでも、一番心に残ったセリフというのは他人と一致しにくいように思う。

しかし残念なのは、どんなに映画館内で「あ！」と思ったセリフでも、数日後にはすっかり消えてしまっていたりすることだ。早ければ数時間後にはあやふやだったりする。心に届いたセリフを、作品からの贈り物として何かに書きとどめ、大切に取っておくのもいいかもしれない。

（たけち　もえ
社会学科　第１学年）

真剣に考えた部門特別賞

節安　祐三子

高校生のとき、人権学習で『砂の器』(1974年・野村芳太郎監督)を観た。

学外に映画を観に行くことは新鮮であった。何よりも、授業がなくなることが嬉しかった。

映画の出だしにおいて、私たち高校生は騒々しかった。刑事役で登場した丹波哲郎に歓声があがり（このたび、生前主張されていた霊界に旅立たれたが、ユニークな人柄とシリアスな演技との違和感は大きかった)、同じく若手の熱血刑事、森田健作にも同様の歓声があがった。しかし、映画の内容から徐々に静けさが生まれ、最後はすすり泣く声がそこここから聞こえてきた。

映画は、殺人事件をきっかけに、新鋭の音楽家の過去が明らかになる。ハンセン氏病（当時は不治の病と言われた）を患った父親が、息子と共に故郷を離れ（離れざるをえなかった)、積雪の中、照りつける太陽の中、ひもじさと偏見の目に耐えながら流浪する。情の厚い巡査によって保護された父子だが、父親が療養所に搬送され、別れを迎える。残された少年は、巡査夫妻が養子として育てようとしたが、夫妻のもとを飛び出し、消息不明となる。少年は、戦争を機に架空の人物となり（つまり過去の自分と離別)、将来を期待される青年音楽家へと成長した。そこへあの時の巡査が現れ、過去の自分が明るみに出ることを恐れ、殺人を犯してしまう。

最初は推理小説のように、犯人追求に目を向けていたのだが、青年の背負ってきた過去の厳しさを知るにあたり、心に痛みが生じた。巡査は青年の過去を明かそうとも、それをもとにゆすろうともしたわけではない。ただ、療養所で暮らす父親に一目会うよう説得したかっただけである。犯人を追跡する刑事が療養所を訪ね、青年の写真を見せる。この青年に心当たりはないか、この青年の少年時代を想像するよう父親にうながすと、父親は「知らない」と嗚咽する。そして、『宿命』と名づけ自ら作曲した交響曲を奏で、万雷の拍手を体中に浴び、名声を手に入れた青年を、舞台の袖で刑事が見守る場面で終わりを迎える。

おそらく青年は逮捕され、犯罪者となるだろう。名声は罵声にかわり、青年はすべてを失ってしまうだろう。殺人は決して犯してはならない罪であるが、彼にここまでさせてしまった本当の罪は、ハンセン氏病への偏見、手をさしのべなかった社会の冷たさにあるのではないか。彼の“宿命”を思う

と涙があふれた。

犯罪だけを罪としていいのか、偏見や社会の冷たさはどのように裁かれるのか、また、私自身は差別をしない人間なのかなど、当時高校生としてはかなりの時間をかけて自問自答した。そして、わきおこる怒りと同時に、自分の弱さを知り落ち込んだ。

今回の執筆を引き受けるにあたり、もう一度『砂の器』を観た。人が簡単に殺され、心が殺されている今の世においては、不本意ながらも、〈宿命〉を背負って生まれてくる人、〈宿命〉を背負ってしまう人も多いだろう。だからこそ、この映画の持つ意味はより深く、重く感じた。残念ながら今度の自問自答も、かなり苦しい結果になるはずである。

（せつやす　ゆみこ
進路就職センター　職員）

不可解な衝撃といまなお続く楽しみ 部門特別賞ー『2001年宇宙の旅』ー

大内　文雄

２時間19分の上映時間のなかで会話部分が40分しかないとは、『2001年宇宙の旅』（1968年、スタンリー・キューブリック監督）を解説するときにたびたび紹介される数字だが、実際のところ、初めてこの映画をみた時の感想は、「しんどいな」というものだった。たいていの人がそうだったらしい。スローモーションで投げ上げられた白い骨、骨のゆっくりした動きに目が同調し始める次の瞬間、時を飛び越え、暗黒の空間のなか、地球を巡る宇宙ステーションが白く輝き、「ツァラトゥストラはかく語りき」「美しく青きドナウ」などのクラシック音楽が鳴り響く。しかし会話はない。ヒトならぬヒトザルとモノリスとの、対話ならぬ対話が延々と続くオープニングの長いこと。「まだ続くのか」と心底思ったことをいまだにはっきりと覚えている。モノリスの刺激を受ける前と後の長大な時の流れを意識させているとも取れるが、いかにも長い。さらに人工知能HALの視覚を示す赤いランプが、その後の展開のなかで主役を占め、しばしば画面を占領せんばかりに大写しになる。HALの反乱とその末路は理解できるものの、結末の不可解さは尋常ではなかった。

しかしそれらを遥かに凌駕する「宇宙の旅」の映像の迫力、無重力シーンや宇宙空間の白黒のコントラスト等々、特殊効果の素晴らしさは今もなお、目を瞠るに足る。しかもこの映画に関わる共同作業について話し合うため、監督キューブリックと作家クラークが初めて会ったのが、クラークによれば1964年４月、キューブリック36歳、クラーク47歳の時となる。映画の製作は翌1965年12月末から1968年３月の末までかかり、４月に公開された。アポロ11号による人類初めての月面降下が翌年の1969年７月だから、タイミングとしても見事なものだが、実際の宇宙旅行の方が、甚だ粗い雑音だらけの白黒テレビの映像とあっては、映画に比べ見劣りしたとしてもやむを得ない。まして冷戦時代の米ソ軍拡競争の一環としての宇宙開発とあっては、当時、この米国の快挙に興奮を感じたものの、何とはなしに釈然としない思いが残ったのも事実だった。それだけにこの映画が突き付けるイメージは強烈だった。キューブリックは一種の天才に違いない。

ところでこの映画を企てるに際し、インスピレーションを与えたクラークの作品が1948年の短編『前哨』であること、映画製作とSF『2001年宇宙の旅』の執筆が同時進行で行われたこと、両者が決して一致せず、かえってSFの方がイメージをつかみ易いこと、続いて『2010年宇宙の旅』が1982年に出版され、84年に映画化されたこと等はよく知られている。しかしＳＦでは87年に『2061年宇宙の旅』が、97年にはついに『3001年宇宙の旅』（原題3001:THE FINAL ODYSSEY）が発表され、クラークの世界では映画を遥かに超えて、明晰なイメージおよびメッセージとともに、我々人類の叙事詩を紡ぎ出してくれている。

結論はこうなる。映画もいいけど、SFはもっといいぞ。

（おおうち　ふみお
教授　東洋史）

若者に薦める魂の叫び部門特別賞
ー『白バラの祈り』ー

友田　孝興

若い人達に是非とも見て欲しい、そして感動と学びを共にして欲しいと願わずにはおれない映画がある。それが第二次世界大戦時の実話に基づくドイツ映画『白バラの祈り』（2005年・マルク・ローテムント監督）である。原題の「ゾフィー・ショル―その最期の日々（Sophie Scholl―Die letzten Tage）」が示すように、これはミュンヘン大学の学生たちが中心になってできた「白バラ（Die weiße Rose）」と呼ばれる、ヒトラーの蛮行阻止を願うグループの一員であった彼女の、逮捕前日からギロチンによる斬首刑に至るまでの最期の６日間、人間としての魂の叫びの軌跡を描いたものである。

哲学部の学生ゾフィーと兄の医学部学生ハンスは、かつてはヒトラー・ユーゲントの一員として、共にドイツの自由と名誉と繁栄を願う良きドイツ少年少女であった。しかしユダヤ人の生きる権利が剥奪され、彼等が死の収容所へと送られるのを見聞したり、イギリスのBBC放送を通してスターリングラードにおけるドイツの敗退と、33万人ものドイツ人兵士が零下30度の極寒の地で命を落としている現状を知るにつけ、もはや沈黙を守り、見て見ぬ振りをしながらヒトラー政権を支えることは、純真な魂を保持する若者にとっては不可能であった。平時に戦争が用意されたように、「白バラ」の若者たちは、1942年６月から翌年の２月に至るまで、計６回にわたって「打倒ヒトラー！」の反戦ビラを作成し、言葉による闘いを極秘裏に断行することを通して、戦時に平和を準備したのである。

1943年２月18日、ハンスとゾフィーの兄妹は、ヒトラー政権の野望がすでに挫折していること、そしてこれ以上の戦争続行はドイツの破滅と犠牲者の更なる増大以外の何ものをももたらさないことを訴えた第６回目のビラを、戦争の早期終結を願いながら、大学の校舎内に秘かに二人でばらまいた。しかし願いもむなしく、ショル兄妹は直ぐさま逮捕されてしまう。翌19日にはビラの草稿を書いた嫌疑で仲間のクリストフ・プロープストも逮捕。そしてそれぞれの逮捕後、即刻にゲシュタポ本部で取り調べが開始される。ゾフィーの尋問官はロベルト・モーア。彼は彼女に対して、ある時は優しい口調で、またある時は激しい怒りに燃えながら、「なぜ誤った信念のために悪質な反逆行為をなすのだ」と迫る。それに対する彼女の答えは「良心のためです。私は自分の行為を反逆とは思っていません」。かくして尋問が終了し、２月22日、悪名高き人民法廷裁判長フライスラーによって３人の即刻処刑の判決が下される。ハンスは叫ぶ、「国民は血を流して平和を願っている。今日は我々でも、明日はあんたが死ぬ番だ！」と。そしてゾフィーは兄とクリストフに笑みを送りながら、「太陽は輝き続けるわ」という言葉を残して21年の生涯を閉じる。すべてを受け容れ、明日を祈りながら。

（ともだ　たかおき
教授　ドイツ文学）

人事

退　職

依願退職

［事務系嘱託］

大谷　のり子（企画室）
2006年８月31日付

浅野　由佳里（企画室）
2006年９月30日付

［学生相談員］

佐々木　玲仁
2006年９月30日付

採　用

［事務系嘱託］

弓削　絵理（企画室）
2006年10月１日付

キャンパス内の喫煙について　マナー向上キャンペーンを実施

本年４月「館内禁煙」がスタートしキャンパス内の喫煙場所を指定しました。その後約半年が過ぎたところで喫煙場所を一部見直し、喫煙コーナーの表示板を設置しました。

喫煙コーナーの表示板設置に伴い、10月２日㈪～６日㈮の間、学生会・事務職員を中心にマナー向上キャンペーンを実施し、「喫煙マナーを守りましょう」と呼びかけました。

喫煙は喫煙コーナーで！！
歩きタバコやポイ捨てはマナー違反です。

全ての人たちが、より良いキャンパスライフをエンジョイできるように皆さんのご理解とご協力をお願いします。　（学生課）

喫煙コーナー表示板

マナー向上を呼びかける学生

「大谷幼稚園探検隊」

６月22日㈭、宇治市にある大谷幼稚園の年長組64名の子どもたちが本学に探検にやってきました。「大谷幼稚園探検隊」と称するこの行事は、大谷幼稚園が本学の付属園になった1994年から毎年、幼児教育科（現　幼児教育保育科）と幼稚園との交流の一環として行っています。今回は、午前中は大学内の探検。幼児教育保育科の学生と子どもたちがグループを組み、情報処理室（パソコンでのお絵かき）、音楽実習室（うたや手遊びなど）、メディアホール（園生活のビデオ上映）、保育実習室（おもちゃ遊び）などの探検ポイントをまわりました。持参したおいしい手作りのお弁当を食べ、エネルギーを補給した子どもたちは、「大谷オリンピック」の会場になっている体育館アリーナに移動。玉入れ、サッカー、フープ、輪投げ、マット、跳び箱などのコーナーで体育遊びを楽しみました。広い体育館に子どもたちの歓声が響き、みんな汗びっしょりでした。「楽しかった。また、大谷大学に遊びに来るね！」と、どの子も満面の笑みで帰っていきました。子どもたちは、12月の幼教フェスティバルで再来学する予定です。　（幼児教育保育科）

オープンキャンパス開催

受験生の方々に本学を知っていただくためのオープンキャンパスを７月１日㈯、８月４日㈮・５日㈯・６日㈰、９月24日㈰に開催しました。

本年度は開催日ごとに特色を持たせ、７月は“キャンパスを自由に歩こう！”と題し、各施設を隅々まで見学していただけるようにスタンプラリーを実施しました。８月は“１日谷大生を体験してみよう！”と題し、１日17コマの模擬授業を実施しました。参加者各自で１日の時間割を組んでもらい、大学生気分を味わっていただけるものになりました。９月は“たくさんの入試情報をつかもう！”と題し、公募制推薦入試（小論文）対策講座を開催し、小論文作成のポイントを講義しました。各日ともたくさんの受験生や保護者の方にご参加いただき、大盛況のうちに終わりました。

また当日の運営にあたっては、多くのボランティア学生スタッフにご協力いただきました。強い陽射しのなか、笑顔で対応していただき、参加者からも大好評でした。来年度も多くの在学生に学生スタッフとしてご協力いただきたく思いますので、よろしくお願いいたします。

（入学センター）

受付の様子

文藝学会公開講演会開催

毎年、７月中旬に国文学・中国文学分野の教員が協力して公開講演会を開催しています。今年は７月12日㈬午後１時～４時に響流館メディアホールにおいて開催しました。学外から、京都大学人文科学研究所所長　金文京先生をお迎えし、「和漢比較文学から東アジア比較文学へ」という講題で、中国文学研究の立場から、まず和漢比較文学の方法について批判され、和漢比較文学の方法では解決できない事例を紹介しつつ、詳細な資料を使って、東アジア比較文学について研究すべき諸問題をご講演いただきました。学内からは、本学専任講師　大秦一浩先生が「てにをは研究史の一端―『のべつづめ』と延約説をめぐって―」というテーマで、国語学の歴史を踏まえて、中世国語研究書に説かれる延言（のべごと）・約言（つづめごと）について、懇切にお話しいただきました。教員・学生などが数多く参集して熱心に聴講し、いろいろと示唆を受け、大変に充実した講演会となりました。なお、両先生のご講演の内容は、文藝学会機関誌『文藝論叢』第67号に掲載されます。

（石橋　義秀）

金文京先生

大谷大学宗教学会「大拙忌記念」公開講演会開催

７月14日㈮、大谷大学宗教学会主催の「大拙忌記念」公開講演会が尋源講堂で京都大学大学院の杉村靖彦先生をお迎えして開催されました。「悪・赦し・贈与―リクールとデリダの最後の論争」と題された講演は、「赦し」をめぐるポール・リクールとジャック・デリダの対話の透明な論理がまるで散文詩のように展開される印象深い講演でした。

杉村晴彦先生

その中でもreconnaissance（承認・再認…）という概念をめぐるリクールとデリダの遣り取りが、きわめて禁欲的にその理路のみが取り出され見事に整理され提示されていました。その点で少し難しく感じられた方もおられたようですが、そこで論じられた問題は、大きくは「命とか人生を大いなる存在からの贈り物と認知（reconnaissance）して感謝（reconnaissance）することが、如何に可能か」という問題であったように思います。この講演は、この秋刊行される『宗教学会報』第15号に掲載されるので、そのような視点から今一度熟読していただければ幸甚です。

いずれにしても、この講演は、リクールとデリダがお互いを認め合い、そして一つの問題を突きつめて対話していった様子が美しく描写された、得がたい講演でした。

（門脇　健）

文学部哲学科第１学年河村敦さん、詩集を出版

本学文学部哲学科第１学年の河村敦（ペンネーム：河村悟空↑）さんが、本年７月15日㈯、文芸社から詩集『平成ファウスト』を出版されました。この詩集は、河村さんの心からあふれ出た言葉をパソコンや携帯電話で文字化し、友人たちに送信した躍動感あふれる作品48編を１冊にしたものです。

河村さんのペンネーム「河村悟空↑」は、中学時代、美術の授業で篆刻に「悟空」と彫ったことに由来します。恩師である美術の先生に創作することのおもしろさを教わると同時に「河村悟空↑」の名で活動することを約束し、現在約束通り、河村さんは心が発する言葉を様々な方法で表現しておられます。

同日、出版記念パーティーとライブが神戸「リングァ・フランカ」で行われ、盛況のうちに幕を下ろしました。河村さんは「この詩集は、僕の生きてきた生命の証です。人は生きてきた以上、いつかは死に、皆平等に土にかえります。そして人は、その短い人生の中で、何かを、自分の存在の価値を、確かめて感じたいと思うもの。そして、僕は、言葉を残したいと思うのです。自分が、いつかは朽ち果て、この肉体が滅びようとも、枯れていく花が種を残すように、僕はこの世界に種を残したい。そして、願わくば、その種が、だれかの希望の種とならんことを。」と話してくれました。河村さんのますますのご活躍が期待されます。

（企画室）

河村悟空↑さん

仰木の里子どもフェスタへの協力

７月17日㈪･祝、大津市仰木の里市民センターにて、第８回「仰木の里子どもフェスタ」が開催されました。このイベントは、子どもの「生きる力」を育む環境充実のため、家庭、学校、地域が連携し、地域社会全体で子どもの教育支援を行うものです。

当日は雨天にもかかわらず、600名を超える参加者がありました。

本学からは、箏曲部、尺八部、空手道部の有志学生が「仰木の里子どもフェスタ」の体験活動に協力参加しました。

箏曲部・尺八部は演奏会にひきつづき、楽器・演奏方法について説明し、そのあと実際に琴・尺八にふれてもらい、簡単な演奏体験をしてもらいました。

また、空手道部の突き・蹴り・受けの基本稽古には、子どもたちや保護者たちも体験参加し、そのあと気合十分の型演武が披露されました。

体験活動に参加した約60名の子どもたちと保護者の方には、レベルの高い大学生の技術・精神にふれる機会になったのではないでしょうか。学生たちには日頃の活動を、子どもたちや保護者の方に披露するよい機会となりました。

（教育研究支援課）

琴の演奏体験の様子

ブータン博物館長、本学訪問

７月19日㈬、ブータン国立博物館館長であるケンポ・プンツォク・タシ(KHENPO Phuntsok Tash)氏が来学されました。氏は、国際交流基金の「文化人短期招聘プログラム」により７月11日より約２週間の日程で日本に招聘され、おもに日本の仏教や社会が抱える様々な問題について見識を深めることを目的として来日されました。

ブータンはヒマラヤ山脈の南斜面に位置し、チベット仏教文化を色濃く残している小王国であり、経済的豊かさを追求する指数「GNP（Gross National Product=国民総生産）」に対し、自然環境や伝統文化を守りつつ社会全体が幸福となるための価値観「GNH（Gross National Happiness=国民総幸福量）」を提唱しています。

学長との会談の中では、このGNHが主たる話題となりました。日本人にとっての幸せとは何か、

あるいは、仏教思想に基づいた幸せとは何か、についての議論がなされました。会談後、図書館や総合研究室を見学した氏は、宗教系の大学で数多くの学生が、仏教を学んでいる事に驚き、「日本が経済的豊かさだけを追求しているのではないことがわかりました」との趣旨を述べられました。

（三宅　伸一郎）

ケンポ・プンツォク・タシ氏（右）

「暁天講座」開講

７月24日(月)～26日(水)に、本年度「暁天講座」が開講されました。各日、参加者は約300名にのぼり、近隣住民をはじめ多くの市民の方々にもご参加いただきました。

「暁天講座」は夏の「安居」期間中の爽やかな早朝に、「安居」講師を迎えて行っているものです。講座期間中は講演終了後、学内食堂で朝粥の接待があり、参加者の中には毎年楽しみにされている方もおられます。

なお、各講師・講題は以下の通りでした。

７月24日　兵藤　一夫(本学教授)「菩薩ということ」

７月25日　延塚　知道(本学教授)「無量寿に生きよう」

７月26日　池田　勇諦（同朋大学名誉教授）「現世を生きる行者」

（総務課）

第3日目講師　池田勇諦氏

『蓮如：現代日本仏教のルーツ』刊行
Rennyo and the Roots of Modern Japanese Buddhism

本書は、室町時代に現われ、その後の真宗の発展に大きく貢献した本願寺第８世・蓮如に関する英文の研究書です。ハード・カバーで、総300ページ、17篇の論文により構成されたアンソロジーです。当初の企画からずいぶん時を経て本年１月、オックスフォード大学出版部より刊行されました。

本書の出発点は、遡れば、1998年６月、本学を会場として開催された「第48回・日本印度学仏教学会・学術大会」の「蓮如」特別部会がきっかけとなっています。この年、ちょうど蓮如上人500回ご遠忌と重なって、特別部会では、内外の研究者によって蓮如についての多くの研究発表があり、これを縁として『蓮如の世界』と題する分厚い研究書が真宗総合研究所より刊行されました。研究所では、本書に掲載された、日本と欧米の研究者による論文を数点選んで、英語による蓮如の研究書を出版するというプロジェクトに取り組みました。編集には、当時研究班のチーフであった安冨とニューヨーク州立大学準教授のマーク・ブラム氏が担当し、本年ようやく上梓に至ったものであります。

（安冨　信哉）

『蓮如：現代日本仏教のルーツ』

「京滋短大フェスタ」開催

７月29日(土)・30日(日)と、京都駅ビル駅前広場を会場に「京滋短大フェスタ」が開催されました。「京滋短大フェスタ」は、本学をはじめ京都、滋賀の17の私立短期大学が加盟する京滋私立短期大学協会の主催により、「教育力と成長度で選ぶなら短大です」をテーマに開催されました。

イベント当日は、各短大がブースを設置して、パンフレットの配布や短大の紹介を行い、来場者からの質問などに対応しました。また、ブース横には特設ステージが

ジャズサークルとのコラボレーション

設置され、各短大の文化系サークルや運動部など13団体のステージ発表が行われました。本学からは30日の総合司会、ステージ運営を大谷大学放送局の学生が行い、幼児教育保育科学生が「学びの発見」での成果を発表した他、空手道部の演武、ギター部、アメリカ民謡研究部による演奏が行われました。

イベントのフィナーレでは、京都外国語短期大学のジャズサークルによる「カントリーロード」の演奏が行われ、放送局、アメリカ民謡研究部の学生が、来場者と一緒になって歌を歌い、大いに盛り上げてくれました。

（企画室）

幼児教育保育科学生の発表

ブースの様子

中国帰国留学生交流会開催

７月30日㈰、中国北京において帰国留学生交流会を開催しました。

この交流会は、大谷大学で学んだ中国からの留学生の数が70名を超えた現在、これら元留学生の方々との交流の場を作り、大谷大学との繋がりや元留学生相互の親睦を一層深めていただきたいとの願いから企画しました。そして、元留学生で本学学術協定校の首都師範大学で教員としてご活躍の孔繁志氏の協力を得て、初めての帰国留学生交流会が実現しました。

交流会には、元留学生の方々をはじめ、交換教員として大谷大学で教鞭をとられた先生など18名が、北は長春、南はアモイやマカオなど中国各地から出席されたほか、本学からは木村宣彰学長、藤島建樹同窓会長、河内昭圓名誉教授など７名が出席しました。

同窓会中国支部長の孔繁志氏

元留学生の皆さんは、大谷大学で学んだ経験から日本の良さを伝えたいという強い信念を持ち、中国で教員となられた方や中国仏教協会で日本との交流責任者という重要なポストについていらっしゃる方など、様々な方面でご活躍です。

皆さんからの現況報告とともに寄せられた声は、「大谷大学の『人間が大好きです。』のスローガンを聞き、大谷大学は人間と人間の成長を大切にする大学と分かり敬服しました」「指導教授の指導は厳しかったですが、今は人生の一番の恩師と感じています」「浄土信仰を深めたのが大谷大学です。そこで自分の人生が決まりました」など、大谷大学に対する温かくも強い思いが込められたものばかりでした。交流会は恩師や旧友との再会の場に留まらず、新しい出会いの場ともなり、和やかな雰囲気の中、盛会裏に終わりました。

中国帰国留学生交流会にて

また、この交流会で大谷大学同窓会中国支部の発足が全会一致で承認されました。支部長には孔繁志氏、副支部長に林観潮氏と李賀敏氏が選出されました。

今後は大谷大学同窓会中国支部のますますの発展が願われると同時に、元留学生の方々と大谷大学の強力なネットワークが世界中に広がっていくことが期待されます。

（教育研究支援課）

韓国 東西大學校短期韓国語研修実施

８月２日㈬～24日㈭まで23日間の日程で５名の学生が東西大學校短期韓国語研修に参加しました。

この研修は、学生の自主的な短期語学研修として語学学習支援室（GLOBAL SQUARE）が参加者を募り、実施したものです。

実地研修までには、語学学習支援室（GLOBAL SQUARE）にて韓国語勉強会を８回にわたり行いました。勉強会では、本学学術協定校である韓国東國大學校交換留学

梵魚寺にて

生のLEE JONGSU（李鍾寿）さんを講師として、留学したときに役立つ韓国語や自己紹介の仕方などを学びました。

東西大學校での語学研修では、東西大學校日本語学科の３名の学生がチューターとして語学学習や日常生活などのサポートをしてくださり、午前中に韓国語授業、午後には文化体験や自由時間が設けられました。韓国語の授業では一人ひとりに配慮の行き届いた丁寧な指導を受けることができました。

また、文化体験ではチョゴリの試着体験やキムチ工場見学、韓国の有名リゾート地である海雲台（ヘウンデ）や梵魚寺（ボモサ）という釜山で最も有名な寺院見学にも行きました。さらに、韓国家庭でのホームステイも体験し、たいへん温かいもてなしを受けました。

参加した学生にとって、短期韓国語研修で出会った人々、文化、言語すべてのことが新鮮で感動的だったようです。このような忘れ難い経験を通じて、韓国語学習への熱意がさらに高まっています。

今後も、語学学習支援室（GLOBAL SQUARE）では、留学希望や語学を学びたい学生の皆さんの支援プログラムを実施していきます。

（語学学習支援室 GLOBAL SQUARE）

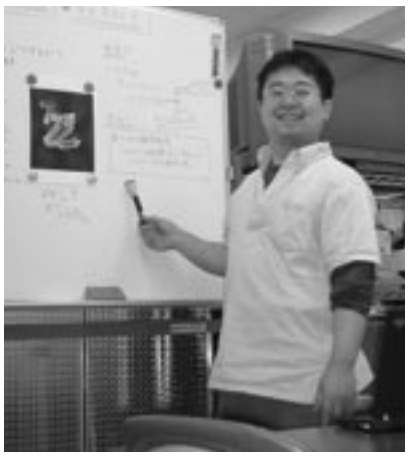
勉強会の様子

本学卒業生 河野清麿さんが映画祭のゼネラルプロデューサーに

本学文学部仏教学科1995年卒業生の河野清麿さんが、８月４日㈮～6日㈰に開催されました「ショートショートフィルムフェスティバル」（SSFF、大阪短編映画祭）のゼネラルプロデューサーとしてご活躍されました。

この映画祭は1999年に東京で産声をあげ、過去８年間にわたり全国７都市、12会場で行われました。本年の大阪短編映画祭は、大阪市中央区大阪ビジネスパーク内で開催されました。若手クリエーターの発掘と育成、そして各国クリエーターの国際交流の場となり、作品のジャンルも多彩なこのショートフィルムの祭典は、今年も映画に興味をもつ多くの人々を集め、盛況のうちに閉幕しました。

大学時代、河野さんは放送局に所属し、卒業後は映画祭の立ち上げ、インディペンデント映画専門のメールマガジンの配信など精力的な活動をされました。そんな河野さんに、俳優の別所哲也氏が代表を務めるこの映画祭のゼネラルプロデューサーの声がかかりました。大阪市内で僧侶をされながら、ゼネラルプロデューサーを務める河野さんは「自分から動かないと夢は実現しません。言い訳をしても、はじまりません。失敗して行動しながら学んでいきます。そして、自分にも夢があるなら、人にも夢があります。その夢をお手伝いしていくことです。」と話してくださいました。河野さんの今後ますますのご活躍が期待されます。（企画室）



河野清麿さん

修士課程仏教文化専攻村上泰教さんが世界宗教者平和会議に代表者として参加

８月21日㈪～25日㈮に世界宗教者平和会議（WCRP）青年世界大会が広島と京都で開催され、本学修士課程仏教文化専攻の村上泰教さんが、真言宗の代表者として参加されました。この大会はWCRP国際委員会が主催。「第８回世界宗教者平和会議世界大会（８月26日～29日）」の関連行事として行われました。この会議には各界から世界を代表する青年、宗教青年リーダー約300名が参加され、「平和のために集う諸宗教」をテーマに討論がなされました。村上さんは全体会議で紛争の現状、紛争解決のために宗教者ができること、

村上泰教さん

紛争という暴力の影響をいかに平和創造へ転換していくべきかを述べられました。

佐々木令信ゼミで研究に励みつつ、愛媛・極楽寺の教学部長や広島・弘元寺の副住職を務めておられる村上さんは「今大会に出席した青年宗教者の多くは何よりも、自分の事よりも“他人（ひと）のしあわせ”を願う者が集まったように感じました。日本人はもっと誠実で、他人を思う気持ちを持つことが必要であり、世の中の現状を見つめ、皆が“希望を持つこと”が大切だと話し合いました。」と話してくれました。　（企画室）

世界宗教者平和会議にて（前列右端が本人）

東北師範大学創立60周年記念式典に出席

９月10日㈰、本学学術交流協定校のひとつである東北師範大学（中国・長春）の創立60周年記念式典に木村宣彰学長、一楽真学生部長、山内美智図書・博物館課課長が出席しました。

東北師範大学は1946年に創立された教員養成大学です。現在では中国東北部随一の総合大学として、教育学をはじめ、政治・法学、経済、商学、文学、歴史文化、外国語学など18の学部を有し、人民大街の本部キャンパスと郊外の浄月キャンパスで約１万人の学生が学んでいます。

本学から記念品を贈呈

本学と東北師範大学との交流は1994年から始まり、1995年には学術交流協定を締結しました。以後、留学生の送り出し・受け入れや短期語学研修団の派遣、学術情報の交換や共同学位授与プログラムの構築など学術交流提携校としての実績を重ねてきました。また、近年双方の教員による共同研究が文部科学省の科学研究費受託研究に採用されるなど、着実にその学術的交流を深めています。10年以上にわたる交流の間には、教員や事務担当者の相互訪問による直接的な対話・協議も実施されてきました。とりわけ2001年の本学近代化100周年記念式典には東北師範大学からもご出席いただき、史寧中学長に学術交流協定校を代表して祝辞をいただいたことは記憶に新しいところです。

今回は、1996年の創立50周年行事に次ぐ大きな式典への出席でしたが、長年の幅広い交流が今回の東北師範大学創立60周年記念式典への本学招聘に繋がったものと思われます。東北師範大学・史寧中学長と本学木村学長との深い絆は、今後の両校の交流の更なる進展を期待させるものでした。

（教育研究支援課）

大学コンソーシアム京都インターンシップ生の受け入れ

９月４日㈪～９月15日㈮まで大学コンソーシアム京都からインターンシップ生の受け入れを行いました。本学での受け入れとしては今年で２年目となります。実習生は、京都橘大学文学部の石田智美さん。所属大学では中世・近世の世界史を研究しながら、教職課程も履修し、将来は教育機関で働くことを希望されています。本学での実習として、企画室で統計資料の電子化・学生動向の分析などのデスクワーク、広報活動の体験（各報道機関へのプレスリリース・取材立会い）を行いました。また教育研究支援部では、総合研究室でのカウンター業務等を行いました。多様なスタッフによって運営されている教育機関でインターンシップを行うことで、自分の目指す進路へ向けてのヒントをつかむ機会となったようです。

石田さんの感想：

10日間という短い期間でしたが、本当に楽しく実習させていただきました。普段の生活では経験できないような業務を行わせていただいて、自分の世界が広がったような気がします。インターンシップで学んだことを忘れず、これから先の自分の進路に向けて頑張っていこうと思います。

（企画室）

企画室で実習中の石田智美さん

大学院特別セミナー公開講演会開かれる

９月15日㈮、響流館メディアホールにおいて大学院特別セミナー公開講演会が開かれました。講師はフランス国立高等研究院教授・本学客員教授のH. O. ロータモンド氏、講題は「明治期の洋行者の異国文化体験」です。ロータモンド教授による2006年度大学院特別セミナーは９月４日～13日に開講され、“欧日文化交流の諸問題―19世紀末「内地雑居論」の現代性を探る―”をテーマに講義と演習形式によって進められました。公開講演会はいわばその最終講義にあたる内容となるものでした。講演では、イギリスに留学した南条文雄（後の本学２代学長）、東本願寺派遣欧州宗教視察団員の成島柳北らが洋行中に詠じた漢詩を多く引用し、彼らの抱いた日本へのノスタルジー、および西洋異文化と日本文化とは同化が可能とする態度などを中心に、異文化体験が自国文化の再評価に繋がるべきことを強調されました。セミナー受講者をはじめ、本学教職員、学外来聴者一同、その内容に熱心に耳を傾けていました。講演終了後には、ビッグバレーカフェにおいて講師を囲むレセプションがあり、参会者は離日を控えたロータモンド教授夫妻との別れを惜しむひと時を過ごしました。

（特別セミナー担当者：木場明志）

H.O.ロータモンド客員教授

実習懇談会を開催

９月19日㈫に、本学響流館マルチメディア演習室において、実習懇談会（保育実習・社会福祉援助技術現場実習）を開催し、児童養護施設や乳児院など、実習でお世話になっている社会福祉施設の先生方19名（16施設）をお迎えしました。

第１部の全体会では、木村宣彰学長の挨拶に引き続き、幼児教育保育科主任・徳岡博巳助教授より「実習終了後のアンケートから見えるもの」というテーマで実習報告があり、次に社会学科社会福祉学分野・佐賀枝夏文教授より、社会福祉士の制度改革に伴う実習の動向や今年から開設された実習支援センターについての説明と協力の依頼を行ない、本学の実習指導に対するご理解を深めていただきました。また第２部では分科会に分かれ、本学学生の実習状況や実習訪問のあり方など、現場の先生方の貴重なご意見をお聞かせいただきました。

その後第３部として、ビッグバレーカフェにおいて懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。

（教務部）

第１部　全体会の様子

ビッグバレー　リニューアル！

１号館１階学生談話室１（ビッグバレー）が改修され、９月21日㈭の後期授業開始にあわせてBig Valley Cafe（ビッグバレーカフェ）としてリニューアルしました。

オープンデッキを増設し開放感を持たせるとともに座席数も増加しました。また、グループだけでなく一人でも利用しやすいようカウンター席も設置しました。

営業時間は午前10時～午後５時ですが、営業終了後も午後８時までは自由に使用することができます。（ただし、大学主催行事等で使用する場合は営業時間、使用時間を変更することがあります。）

メニューはパンを中心にサラダ、スープ、コーヒー等のドリンク、スイーツなど多彩です。

パンは、季節によって種類を変え、午前10時、正午、午後２時30分の１日３回、焼きたてを提供します。サラダ、スープは日替り（週替り）で数種類のメニューを提供します。コーヒーは本格派、味にこだわりました。

また、営業時間内でもお弁当を持参された方の食事、休憩、待ち合わせなどにも自由に使用できます。

（総務課）

学生が集まるオープンカフェ

前期卒業式を挙行

９月29日㈮、2006年度前期卒業証書・学位記授与式が講堂において挙行されました。文学部32名、短期大学部２名の卒業生に、「卒業証書・学位記」が授与され、木村宣彰学長の告示に続いて、真宗大谷学園熊谷宗惠理事長より祝辞が述べられました。

引き続き、多目的ホールにおいて卒業と同窓会への入会を祝って、同窓会主催の「大谷大学卒業・修了並びに同窓会新入会員歓迎祝賀会」が開催され、卒業生、ご父母並びに教職員が一堂に会し、和やかなひとときを過ごしました。（総務課）

卒業証書・学位記授与風景

「全国父母兄姉懇談会」開催

大谷大学教育後援会では、在学生の父母兄姉を対象に、全国各地の数都市を会場に「父母兄姉懇談会」を開催しています。今年度は既に盛岡、東京、福知山、長野、新潟の５会場で開催し、来る12月９日㈯には福井を会場に実施を予定しています。

それらの地区懇談会に加えて、去る９月30日㈯、全在学生の父母兄姉を対象に「全国父母兄姉懇談会」を、本学を会場に開催し、約280名のご父母兄姉をお迎えしました。

第Ⅰ部全体会の開会挨拶では、頼尊聖教育後援会会長から教育後援会の大学への関わりや、その役割の重要性について、また木村宣彰学長からは、大谷大学存立の意義と教育に対する基本姿勢について述べられました。引き続き、教育・研究、学生生活等について大学の現況報告がなされ、本学に対するご理解を一層深めていただきました。全体会終了後、個別相談会ならびに響流館を中心とした施設見学・博物館の観覧等がありました。個別相談会では、学科・成績・進級、進路・就職、海外留学、学生生活、よろず相談の各コーナーが設けられ、ご父母兄姉から熱心な相談が多く寄せられました。

また、第Ⅱ部の懇親会は会場を京都宝ヶ池プリンスホテルに移し、約90名の教職員出席のもと、ご父母兄姉との和やかな懇談の場として、有意義なひとときを過ごしました。（校友センター）

個別相談風景

大谷大学版 インターンシップ実施

本年度より本学独自のインターンシップ・プログラムを開講し、11名の学生が参加しました。このプログラムは、ビジネススキルアップ、リスクマネジメント等の事前講義を受講し、夏期休暇中に企業や事業所、病院などで「働く」ことを実際に経験する実地体験型のプログラムです。実習終了後は事後講義を行い、９月30日㈯には、実習生全員が自らの体験をプレゼンテーション形式で発表しました。実習前と後では、学生一人ひとりの表情や考え方も変わり、参加者の今後が期待されます。

本学OGの指導を受けての実習体験

＜実習生の声＞

史学科　第３学年　中野　遼

８月末から９月上旬まで、京都市内の「株式会社グラフィック」という印刷会社へインターンシップに行きました。たった２週間でしたが実際に「働く」ことを体験し、就職に対する価値観がガラリと変わりました。今までは就職活動に対して漠然とした印象しかなく、他人事みたいに考えていましたが、実習に参加してからは、自らが体験したことなので、自分の価値観だけでなく、様々な角度から企業や自分自身を捉えるようになりました。これからはこの経験を活かし、社会・企業を知るだけでなく、自分自身をもっと知っていこうと思います。

（進路就職センター）

インターンシップ報告会の様子

真宗総合研究所開設25周年記念シンポジウム「南都仏教の中世的展開」開催

10月６日㈮・７日㈯の両日にわたり、日米の研究者16人を招き、真宗総合研究所の25周年を記念して「南都仏教の中世的展開」と題したシンポジウムが開催されました。シンポジウムでは３パネルに分けて12の研究発表が行われました。各パネルとも参加者は30人から40人とやや少なめでしたが、参加者の間では活発な意見交換が行われ、大変有意義な会となりました。また、シンポジウムの一環として米国プリンストン大学教授のジャクリーン・ストーン教授による日本語の公開講演会「死の克服―中世日本の臨終行儀をめぐって」が開催されました。一般の来聴者も含めて約50人の参加者を得て行われたこの講演で、ストーン教授は具体的に分かりやすい例を挙げながら、中世から近世にかけての臨終行儀の変遷を論じられました。

（真宗総合研究所）

ジャクリーン・ストーン教授

2006年度博物館特別展「大拙 その人と学問」スタート

今年度の博物館特別展は、40年の長きにわたり本学教授を勤められた仏教学者・鈴木大拙先生の没後40年を記念し、「大拙　その人と学問」と題して10月10日㈫から開会しました。この記念展は鎌倉国宝館、金沢市立ふるさと偉人館における巡回展を終え、最終会場・本学博物館での展示となったものです。

会期に先立つ10月９日㈪の開会式典には、主たる展示品の出品者である松ヶ岡文庫、金沢市立ふるさと偉人館、真宗大谷派など関係各位列席のもと、学内外の関係者や報道関係者が出席し、式典、内覧会を挙行しました。

今回の記念展では大拙の研究業績や墨蹟、遺愛の品々を展示し、研究と教育に邁進されたその人となりを博物館展示室と図書館内特別展示コーナーにおいて紹介しています。また、博物館展示会場前の通路では大拙の講演を音声資料と写真データによって再構成しています。会期は11月28日㈯までで、火・木・金曜日には展示品解説ツアーも行っています。

詳細は博物館受付にお問い合わせください。

（図書・博物館課）

開会式典の様子

内覧会の様子

尋源館車寄改修工事実施

尋源館（赤レンガの旧本館）は1913（大正２）年に竣工した大谷大学のシンボル的建物で、2000（平成12）年には国の登録有形文化財にも指定されています。1982（昭和57）年には内部を改装し現在も１階は教室に、２階は事務室等に使用していますが、尋源館南側の車寄部分の支柱と銅板屋根の傷みがここ数年目立ちこの夏改修工事を行い元のように修復されました。

（総務課）

改修された尋源館車寄

「開学記念式典並びに初代学長清沢満之謝徳法要」を挙行

10月13日㈮、「開学記念式典並びに初代学長清沢満之謝徳法要」が挙行されました。本学が10月13日を開学の日とするのは、近代的大学として出発した1901（明治34）年の開校式が挙行された日によります。

式典は讃歌、法要に続いて、永年勤続者の表彰と記念講演が行われました。本年勤続30年を迎えられた大内文雄教授をはじめ９名の方に表彰状と記念品が贈られまし

た。

また、本年度の記念講演は本年が元本学教授鈴木大拙先生の没後40年にあたることから、博物館の特別展鈴木大拙没後四十年記念展「大拙　その人と学問」との共同開催として、京都大学名誉教授上田閑照氏より「『間』の妙 鈴木大拙と曽我量深」と題して講演を頂きました。

（総務課）

上田閑照氏

美濃部裕道さんが「のじぎく兵庫大会」にて優勝

10月14日㈯～16日㈪にかけて開催されました「第６回全国障害者スポーツ大会 のじぎく兵庫大会」にて、文学部社会学科第１学年の美濃部裕道さんが14日に開催されたビーンバッグ投げ競技にて、見事、11m79cmの大会新記録で優勝されました。また、16日に開催されたスラローム競技においても３位（銅メダル）を獲得されています。

全国障害者スポーツ大会は、スポーツを通じて人々の障害に対する理解を深め、障害者の社会参加に寄与することを目的に開催される全国的な祭典で、第６回となる今年は、兵庫県を会場に「はばたこう ともに今から ひょうごから」をスローガンに開催されました。

美濃部さんが優勝したビーンバッグ投げ競技とは、12cm×12cmの布に、乾燥した大豆などを入れ150gの重さにしたバッグを円盤投げ用のサークルから投げ飛ばし、その距離を競う競技です。

今回の優勝について美濃部さんは「新記録を出せたことは、大きな自信となりました。たくさんの人々との出会いがパワーとなりました。感謝の気持ちでいっぱいです。」と話してくれました。今後のご活躍が期待されます。

（企画室）

ビーンバッグ投げ競技の様子

ご家族と優勝を喜びあう美濃部さん

大谷学会研究発表会開催

10月20日㈮12時50分より、響流館メディアホールを会場として、大谷学会研究発表会が開催されました。発表30分、質疑応答10分という限られた時間内の研究発表でしたが、前もって用意された資料に基づきながら、４名の本学教員が日頃の研究の一端を発表されました。また、学外からの参加者も多く、活発な質疑応答がなされました。今回の発表内容は、例年通り『大谷学報』に掲載される予定です。なお、題目・発表者は次の通りでした。

研究発表会の様子

仏典を現代語訳するということ
　　加治　洋一　助教授

黄泉の土地と冥途への旅
　―古代中国人の世界観
　　浅見直一郎　助教授

「雨の中の猫」の中の三毛猫
　　浅若　裕彦　助教授

カントの根本悪説
　―その一考察―
　　村山　保史　助教授

（大谷学会）

同窓会支部から丸太イスが寄贈される

このたび、同窓会北の国支部・砂川支部から丸太イス（５脚）が寄贈されました。

この丸太イスは、楡の木の株を加工したもので、「構内の一角に置いていただき、休憩時間にでもベンチ代わりとして学生に利用していただければ」との意向によりご恵贈いただいたものです。

同窓からの心こもる贈り物。大切に利用したいと思います。

（校友センター）

丸太イスでくつろぐ学生

Tomorrow, and Tomorrow, and Tomorrow「空過」

井上　尚実

人文系の「学問」に対する漠然とした憧れから文学部に入り、大学時代は読書に没頭して過ごした。といっても、それは学問に直接結びつくようなものではなく、まったくの濫読であった。教養の２年間は、現代アメリカ文学に傾倒し、それを専攻しようかと考えた時期もある。結局、文学は趣味のまま、仏教学に進んだのであるが、振り返ってみると、その時期の濫読と現在取り組んでいる浄土教・真宗研究との間には、目に見えないつながりがあることに気付く。20歳の頃に読書を通じて感じ考えたことや、そこで抱いた疑問が、その後の研究テーマと通底しているのである。

当時よく読んだ作家の一人にジョン・アップダイクがある。非常に語彙の豊かな洗練された作家で、原文で読むのはかなり難しいが、２回生の講読で彼の短編集を読むクラスがあったので友人と受講した。その授業で美しく印象的なエピファニー（本質の具現・その象徴的表現法）について学び、それを味わう喜びを覚えたように思う。特に好きになったのは、ある高校教師の悲哀と微かな希望を、シェイクスピアのマクベスを教える授業風景を通して描いたTomorrow and Tomorrow and So Forthという作品である。

雨が降り出しそうな午後の教室、落ち着かずやる気のない生徒達に、死を目前にしたマクベスの独白（第５幕第５場）を朗読させるシーンには、教師の悲哀と共に、真実と希望のエピファニーが反語的に描き出される。講読授業では、我々学生もその有名な台詞を暗唱させられ、四半世紀が過ぎた今も心に残っている。

“To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,（明日が、明日が、また明日が）/ Creeps in this petty pace from day to day,（忍び足に日々来たり過ぎゆく）/ To the last syllable of recorded time,（定められた最後の一刻にいたるまで）/ And all our yesterdays have lighted fools（総て昨日という日は、我ら愚か者が）/ The way to dusty death. Out, out, brief candle!（不毛な死に至る道を照らしてきた。消えよ、消えよ、はなかい灯火よ！）/ Life's but a walking shadow; a poor player,（人の生は歩く影にすぎない。哀れな役者だ）/ That struts and frets his hour upon the stage,（舞台に出番のある限り、見得を切ったり悩んでみたり）/ And then is heard no more: it is a tale（袖に入ればそれきりだ。それは一つの物語）/ Told by an idiot, full of sound and fury,（まぬけの語る物語。響きと怒りばかりで）/ Signifying nothing.（何の意味もありはしない。）”

20歳の青二才なりにマクベスの絶望に共感しつつ、それでも人生には何か意味があるだろうと信じ、学部では文学でなく仏教を「勉強」した。しかし、そんな調子で答えが見つかるはずもなく、迷いは深まるばかり。いくたびかの挫折と紆余曲折を経た30過ぎになってようやく、浄土経典や親鸞が語る回心の物語の中に、ヒエロファニー（聖なるものの顕現・大悲のはたらく姿）を垣間見ることができるようになった。それを学問的な解釈に深めて伝えることが現在にいたる課題である。

人間学Ⅰや真宗学演習Ⅰの授業で「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつてそらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」という親鸞の言葉を紹介するたび、マクベスのTomorrow Speechとアップダイクの短編が思い出される。

（いのうえ　たかみ　講師　真宗学）

2006年度　海外研修を終えて

中国　首都師範大学短期中国語研修

８月６日(日)～９月３日(日)
参加学生数16名（引率者２名）

○首都師範大学にて語学研修
（４週間）
授業内容：総合中国語（文法）,実用口語（会話）,LL中国語（聞き取り）,中国書画（書道と水墨画）,太極拳
○小旅行：承徳市内見学
（２泊３日）
○文化研修：万里の長城,明の十三陵,京劇鑑賞,周口店,石経山,雲居寺,雑技鑑賞,頤和園

長城にて

中国の首都師範大学で、８月６日から９月３日までの29日間、語学研修を実施しました。到着翌日、早速、面接試験によるクラス分けが行われ、夏休み気分もすっかり吹き飛んで、すぐに研修モードに入りました。

授業は月曜から金曜の朝８時から12時まで、２コマ４時間です。最初は不安でいっぱいでしたが、優しく熱心な先生方のご指導のおかげで次第に中国語で受け答えできるようになりました。先生の仰ることを聞き取るだけでも必死なのに、毎回必ず全員がそれぞれ正しい発音の中国語で答えなければならず、毎日が緊張の連続でしたが、この緊張感はいつの間にか日本では味わえない快感へと変わっています。バラエティに富む授業に、時間があっという間に過ぎていきました。

授業風景

午後は自由行動で、２年後のオリンピック開催に沸く北京市内をそれぞれ見学に出かけました。熱気溢れる街・複雑なバス路線・沢山の名勝旧蹟・新しいお洒落な一角・昔ながらの庶民の生活場所などなど、学生たちはただただ圧倒され、行きたい場所が多すぎて、時間が足りないほどでした。

土曜日には文化研修として郊外へ出かけました。世界の観光客が訪れる万里の長城・明の十三陵はもちろんですが、一般旅行客が訪れる機会の少ない周口店の北京猿人遺跡や房山石経で有名な石経山・雲居寺へも足を運びました。

修了式

日曜日は伝統文化の鑑賞です。京劇では美しい衣装と歌声に魅了されました。また、雑技では人間離れした強靱な肉体と卓絶した技に溜息が出て止まりませんでした。小旅行では承徳を訪れ、皇帝の離宮である避暑山荘を巡って、その広さに当時の皇帝の権力を実感しました。チベット仏教寺院小ポタラ宮・世界最大の木彫千手観音・道教の寺院を見学し、宗教文化の理解に努めました。

最終日には皆、口々に「日本に帰りたくない」とこぼしていました。ある学生は「４週間は本当にあっという間で、日本で過ごすより３倍充実していた」と。またある学生は「１ヵ月なんて短すぎるとわかった。今度は１年留学したい」と。それぞれの思いを胸に帰国の途につきました。

（浦山　あゆみ）

英国キール大学短期英語研修

８月７日㈪～８月31日㈭
参加学生数　27名（引率者２名）

○キール大学にて語学研修（19日間）
○文化研修：Stratford-upon-Avon,Liverpool,Chester,Oxford, Wedgwood Visitor Centre,Little Morton Hall,Monkey World
○観劇：Twist and Shout
○ロンドンにて文化研修（４日間）

チャールコート・パークにて

キール・ホールでの修了式

本年度の英国夏季語学研修は、イングランド中部のスタフォードシャーにあるキール大学で行われました。キール大学はイギリスの中で最も広いキャンパスを持つと言われ、敷地内には森や牧場もあり、緑豊かな自然に囲まれています。

研修はその広大なキャンパスとシンボル的な建物であるキール・ホールを巡るツアーから始まり、オリエンテーションの後、プレイスメント・テストにより、学生たちは３つのクラスに分けられました。授業は、英会話の授業の他に２、３人のチームに分かれてテーマを決め、インタビューなどを通して得たデータをもとに発表するというプロジェクトのための授業が行われました。今回の研修は初めての試みとして東京の大東文化大学（参加者16名）と合同で行われましたが、学生たちは一緒に学ぶ中で交流を深めていったようです。

小旅行では、ビートルズを生んだリヴァプールやウェールズにほど近いチェスター、シェイクスピアの生誕地ストラットフォード、大学の町オックスフォードを訪ねました。どの地もイギリスの歴史と伝統を感じさせる趣のある場所ばかりでした。また、キール大学の周辺は、陶磁器の製造で有名な地域であり、午後からウェッジウッドの工場を見学したり、リトル・モートン・ホールという中世からの古いマナーハウスを訪ねました。

修了式は、キール・ホールでホスト・ファミリーも列席する中で盛大に行われ、学生たちは感謝の気持ちを込めて全員で歌を披露し､思い出深いものとなりました。

学生たちは１週間のホームステイと２週間の寮生活を体験しましたが、特にホームステイでは家族として暖かく迎えられ、すっかり打ち解けた様子でした。そのせいか、イギリス滞在中、誰一人としてホームシックにかかる者や体調を大きく崩した者はなく、全員が元気一杯で思う存分、研修を楽しんでいる様子がわかり、引率者としては大変頼もしく感じました。

ただ、今回は、イギリス到着後にテロ未遂事件が発覚するというハプニングがありました。幸い大きな影響はありませんでしたが、世界情勢の不安定な中での海外研修については今後も細心の注意が必要である事を実感しました。

（村瀬　順子）

大英博物館の前で

ヨーロッパ文化研修＜ドイツ＞

８月31日㈭～９月13日㈬
参加学生22名（引率者２名）

○マールブルク,ゲッティンゲン,ライプツィヒ,ドレスデン,バンベルク,ローテンブルク,ミュンヘン,フュッセン,テュービンゲン,ハイデルベルク,ダッハウ

ノイシュバンシュタイン城にて

今回の研修旅行は、ドイツ文学の要とも言うべきゲーテとシラーの関連史跡を中心に据えてコース設定がなされ、途中の文化遺産を貪欲に見て回るという盛りだくさんなものでした。かえって印象が希薄にならないかと心配されましたが、参加者の興味は尽きず、有意義なものとなりました。

以下参加学生の日記から若干紹介しましょう。

多くの荘厳華麗な教会を巡ったが、中でもミュンヘンにある聖ペーター教会では、夕方の礼拝の儀式にも立ち会うことができた。市の中心であるマリエン広場から程近いところに建つこの教会は、ミュンヘン最古の教会で、地元の人には「アルテ・ペーター（年寄りペーター）」と愛情を持って呼ばれている。礼拝の儀式にも多くの地元民が参加しており、教会に入ると同時に、重い扉の向こうから聖書を読む声が響いてきた。

礼拝に参加しているのは若い青年から老婦人まで実に幅広い年齢層にわたり、もちろん職業や環境なども様々だろうが、礼拝では同じ聖書を読み、平等に聖体拝受をするのである。最後に全員で「アーメン」を唱え終わると、人々は各自神に祈り始めた。すぐに退席する教徒もあれば、随分と長い間祈っていた者もある。中にはどんな小さな石像にも膝を折って祈っていく信者の姿もあった。彼らはミュンヘンの街中を歩いている普通の人々だが、祈っている姿や、地に膝をつけて主に十字を切る姿には美しい神聖さが感じられた。

ライプツィヒにて

また、途中、ダッハウ強制収容所に立ち寄ることができた。ドイツの歴史の中でも暗く重いヒトラーの時代。それを今に物語る収容所跡は、まるでドイツの地に押された焼印のように感じられた。ダッハウ強制収容所は、主にナチスに反対する“政治犯”とされた人々が収容された場所で、かなりの規模を持つものである。充分な時間がなかったため、一部しか見ることが叶わなかったが、足を踏み入れるだけでも恐怖を感じさせる無機的な印象を与える場所である。

門をくぐると、すぐに広い更地が目に入ってくる。真っ白な、とにかく広いその場所は毎朝毎夕、囚人達の整列が行なわれた場所だ。何より、ここで死んだ20万人の被収容者たち全員が一度は立っていた場所でもある。広場は両側を収容棟に挟まれ、見学者はその中にも入ることができる。収容棟は、広場に沿って長い平屋に建てられており、入ると一直線の長い

廊下の両側にずらりと木戸が並んでいた。木戸をくぐると部屋にはそこにいた被収容者３人の顔写真があり、収容されていたのが成人男性だったことがわかった。しかし、部屋は成人男性３人が寝起きするにはあまりに小さすぎる。３人寝転べば部屋はいっぱいだっただろう。この小さな部屋は映画や想像力の決して及ばない世界だ。現場に身を置くことの大切さを実感させられる。また、少ない時間の中でガス室と焼却炉も見学したが、これも想像を超えるものだった。ガス室の天井は驚くほど低く、ガスが下へ流れるため人々がこぞって他人を押しのけながら、人の山の上へ登ったというが、信じられない。ガス室の天井は、バスの

ダッハウ強制収容所

屋根ほどの高さだというのに。ガス室の横にあった焼却炉４台が並ぶ焼却室も、毎日数多くの人間を燃やしたとは思えない広さで、その２つを思い出すたびに、人間は何と簡単に「大量処分」できるものかと悲しくなる。

以上、印象的な部分を紹介しましたが、こうした体験のほかにも、研修中には多くの貴重な体験ができたことと思います。ドイツの人々の生活や歴史、いまだに残る旧東・西ドイツの大きな格差、南北でまったく異なった食文化、異なった言語圏で自分の意思を伝える努力等、苦労しなかった日は一日とてないと思いますが、笑顔を向けてくれるドイツの人々に感謝を覚えなかった日もなっかたのではないでしょうか。皆、出発の日にみせた幾分かの不安を秘めた顔とは違う、一皮むけたたくましさを感じさせる顔になって帰ってきました。実りのある研修旅行であったようです。

（アルブレヒト　デッケ＝コルニル）

インド仏教遺跡研修

第１班　８月27日㈰～９月10日㈰
参加学生数　21名（引率者３名）
第２班　９月２日㈯～９月16日㈯
参加学生数　22名（引率者３名）

主な研修地

○仏跡: サヘート（祇園精舎）,マヘート（舎衛城）,ルンビニー（マーヤー夫人堂,アショーカ王石柱）,カピラヴァストゥ（ピプラハワー,ティラウラコット）,クシーナガラ（涅槃堂）,ヴァイシャーリー,ラージギル（王舎城）,ナーランダ大学跡,ブッダガヤー（大塔,金剛宝座）,サールナート（迎仏塔,ダメーク塔）

○博物館: ニューデリー国立博物館,サールナート考古学博物館,マトゥラー州立博物館

○その他: ラクシュミナラヤン寺院,インド門,ラージガート,ガンジス河の沐浴風景,タージマハル,クリシュナジャンムブーミ,ヤムナー河の沐浴風景,インド舞踊鑑賞

牛車に遭遇

祇園精舎にて（第２班）

霊鷲山での勤行

モンスーンが過ぎ去ったばかりで蒸し暑いインドの空気にふれた瞬間、期待と不安とが入り交じった独特の緊張感を覚え、大きく深呼吸しました。首都デリーに降り立った我々は15日間の研修をスタートさせました。

「見るに値し、心動かされる場所」と仏典に記された場所があります。釈尊誕生の地ルンビニー、成道の地ブッダガヤー、初転法輪の地サールナート、入滅の地クシーナガラです。これらは仏教の四大聖地と呼ばれ、多くの人たちをひきつけてきました。仏教の聖地とは、我々にとっていかなる意味を持つのでしょうか。それぞれの場所を訪れ、そこに身をおいたとき、我々は容易には何も語ることができず、しばらく静かに立ちつくすことになりました。

貴重な出土品が展示されている博物館を見学することができ、現地の人々の生活を間近にみて、多様なインド文化にじかに触れることもできました。そのときの学生たちの驚きは大きく、その経験は何事にも代えがたいものだったようです。

こうして本年度も、文学部・短期大学部・大学院、そして単位互換制度を利用して参加していただいた他大学の学生たちとともに、無事インド研修を終えることができました。

容赦なく太陽が照りつけ、砂塵が舞っていました。混沌とした街があり、地平線まで広がる田園風景がありました。川のほとりで一心に祈りをささげる女たち。汗だくになってサイクルリキシャをこぐ男たち。貧しくとも底抜けに明るく無邪気に遊ぶ子どもたち。インドには様々な顔がありました。研修に参加した学生たちはそこに何を見いだしたでしょうか。少なくとも自分自身の糧となる何かを得たことでありましょう。

（箕浦　暁雄）

サリー・パンジャビードレスを着て夕食

タージマハルにて

2006大谷大学紫明祭

テーマ：「三縁新花～新たな絆、永久に咲かせて～」

期　間：2006年11月10日(金)～11月12日(日)

日	場　所	イベント名	時　間	内　容　概　略
10日(金)	野外ステージ	前夜祭		2006年度紫明祭の開催を告げるイベント
		前半部「単位認定!? Let's enjoy のど自慢!」	16:00～18:00	教職員、学生、近隣住民によるカラオケ大会（飛び入り参加OK!）
		後半部「BINGO@チョイス&チャンス.」	18:00～19:30	イベント・展示バザー紹介、ビンゴゲームなど
11日(土)	野外ステージ	Festival of the Music　谷大統一音楽祭	第1部 10:15～13:15 第2部 15:30～20:00	学内で活動している音楽系団体によるバンド、合唱、楽器演奏など
		名門大谷小学校～はじけろ! 6年1組☆～	13:30～15:00	小学校を模した参加型ゲームイベント
	講堂	川嶋あい Live in 紫明祭	16:00～18:00	川嶋あいによるコンサート（有料）
	博綜館5階 第1会議室	大谷大学同窓会 ホームカミングデー	13:00～16:00	同窓会主催による同窓生の里帰り企画
	2号館	高田崇史 講演会	13:00～16:00	推理小説研究会主催の講演会（有料）
	キャンパス内	ヨ～ヨ～。　ユーもすくっちゃいなヨ!	12:00～15:00	子ども向けイベント　ヨーヨーすくい
	響流館3階 メディアホール	全国高校生「人間が大好きです」表現コンテスト	11:00～12:00	大谷大学主催の、映像やホームページによるコンテストの表彰式
12日(日)	野外ステージ	CROSS × BAND	10:30～14:30	五団体の有志によるライブ
		谷大プチバトルロワイヤル ～みんなで楽しんじゃえよ～	15:30～16:30	ゲームイベント
		後夜祭 D-1☆グランプリ　2006～競舞&共舞～	17:30～20:00	2006年度紫明祭の最後を飾るイベント ダンス大会&ダンスパフォーマンス
	講堂	VIVA 体育会	9:00～12:00	体育会主催によるイベント
		東儀秀樹 講演会	15:00～16:30	東儀秀樹による講演会（有料）
	キャンパス内	押してGETのスタンプラリー	10:00～17:00	スタンプラリー（景品あり。景品なくなり次第終了）
	柔道場	大谷大学柔道部主催学内親善柔道大会	13:00～15:00	柔道部主催イベント
11日・12日	博綜館 ピロティ	OBSサテライトスタジオ	10:00～20:00	放送局による学内の案内・イベント
	キャンパス内	学内展示・バザー	11日　10:00～19:00 12日　10:00～18:30	学生によるバザー・展示
		外部フリーマーケット	11日　10:00～19:00 12日　10:00～18:30	学外団体によるフリーマーケット
	学内食堂	サントリー酒場	16:00～19:30（酒の提供は17:00～）	体育会による酒場
	博綜館1階 保健室	ータバコ被害測定ー	11・12日　13:00～16:00	呼気一酸化炭素濃度を測定し、タバコによる害の程度をチェック
	博綜館1階 入試センター	入試相談コーナー	11・12日　10:00～16:00	入試に関する疑問・質問にお答えします。

イベントの内容や時間、出演者等を変更する場合があります。あらかじめご了承願います。

「三縁新花（さんえんしんか）
～新たな絆（きずな）、永久（とわ）に咲かせて～」

大谷大学学園祭実行委員会
委員長　白木澤　琴

本年度、私達の紫明祭は、新たなスタートを切ることとなりました。

これまで４日間にわたって行われていた紫明祭でしたが、授業日数確保のため、本年度より３日間に変更となり、運営内容の変更を余儀なくされたのです。

大きな変革の中、私たちはこのテーマを掲げ、準備を進めてきました。

「三縁新花～新たな絆、永久に咲かせて～」

この「三縁（さんえん）」とは、地域の方々との縁、ゼミ・クラスを含めた学生と先生方との縁、これまで紫明祭に携わってきた多くの方々との縁を表しています。「新花」には、「進化」という意味を含めると同時に、たとえ紫明祭の期間は短くなっても、これら三縁（さんえん）の繋がりは一層深まり、紫明祭を機とする新たな出会いが花開き、咲き広がって欲しいという想いが込められています。そしてサブテーマには、紫明祭を機に生まれた、この出会いが深い絆となり、永久に続く縁となってほしいという想いを込めました。

毎年掲げられるテーマ。テーマを掲げることはできても、それに基づいた紫明祭を実現させることは容易ではありません。しかし今年はいかに「三縁（さんえん）」の繋がりを深めるかという点に重点を置き、実行委員一人ひとりが着実に準備を進めてきました。

本年度より、展示バザーにおいてはサークル団体だけではなくゼミ・クラス単位でも参加していただくよう先生方の力をお借りして、呼びかけを行いました。そして地域の方々にはフリーマーケットの場を設け、北区役所の協力のもと、呼びかけを行いました。

また、各種イベントのスタートを切る前夜祭（昨年度までは園遊会）においても、学生だけではなく先生方及び地域の方々にも参加していただけるよう企画しています。

今、私たちは大谷大学の歴史の中でも大きな節目にいると言っても過言ではないでしょう。新たな基盤を作り上げる上での第一歩は決して楽なものではありません。しかし私たち学生、先生方、地域の皆様、一人でも多くの方が紫明祭を機に出会い、絆を深めていけることを願っております。

最後に、紫明祭は学園祭実行委員会だけで作り上げるものではありません。展示バザーを出す方、ステージで演奏する方、さらにそれを見に来て、楽しんでくださる方がいて初めて「紫明祭」という一つの祭りとなるのです。誰一人欠けても紫明祭は完成しないのです。大きな節目となる紫明祭、一人でも多くの方々の笑顔に出会えることを楽しみにしています。

総　務　課

大谷大学報恩講並びに歴代講師謝徳法要

大学報恩講並びに歴代講師謝徳法要を右記の日程で厳修いたします。皆さんお誘い合わせの上、ご参加下さい。

日時　11月27日(月)　午前10時
場所　講堂
(記念講演)
講師　本学名誉教授　幡谷　明氏
講題　大悲心に生きる
　　－無住処涅槃と還相回向－

年末・年始の日程

12月27日(水)　宗祖御命日勤行
　　—事務休止—
1月9日(火)　修正会
　　授業再開

教　務　部

真宗大谷派教師前期・後期修練、教師補任申請の説明会について

後期修練ならびに教師補任申請（大学院・文学部・短期大学部の修了・卒業年次生主対象）の説明会を11月中旬に行います。

また、前期修練（短期大学部第1学年、科目等履修生真宗大谷派教師資格取得コース生主対象）の説明会を12月中旬に行います。

受講予定者は教務部掲示板にて日時等を確認の上、説明会に出席してください。

修士論文・卒業論文の提出について

◎論文提出・題目変更締切日について

来年3月、文学部卒業見込み、大学院修士課程修了見込みの学生は、右記の一覧表で論文提出締切日等を確認の上、期日を厳守してください。

なお、題目を変更する場合は、所定の「題目変更届」を教務部窓口で受取り、指導教員の承認印を得た上で、右記の題目変更締切日までに教務部へ提出してください。

◎提出場所について

教務部窓口に提出してください。ただし、修士論文の提出最終日および卒業論文提出最終の2日間は右記の会場に提出してください。

— 題目変更・論文提出締切日時について —

種別	題目変更締切日時	論文提出締切日時
修士論文	12月4日(月) 午後5時	12月11日(月)午後4時
卒業論文	12月15日(金) 午後5時	1月10日(水)午後4時

— 提出最終日の会場について —

種別	最終日	会場
修士論文	12月11日(月)	至誠館会議室(至誠館2階)
卒業論文	1月9日(火) 10日(水)	多目的ホール (講堂棟3階)

(注意事項)

■論文等の提出方法や様式については『履修要項』や『卒業論文作成の手引』で確認してください。

■ワープロ使用や縦書・横書等の様式については、分野により制限事項が異なりますので、事前に指導教員と相談してください。

なお、ワープロを使用する場合で、所定の書式以外で提出する場合は、題目変更締切日までに「ワープロ書式所定外作成届」を提出してください。

■提出最終日の締切時間「午後4時」とは、題目確認・ページ数の記入・目次の作成・見返し等をすべて整え製本した状態で提出する最終時間のことです。午後4時の段階で、この要件を満たしていない論文は受領できませんので注意してください。

図　書　館

情報検索ガイダンスについて

●論文作成や試験に備えて、図書資料の検索方法についてガイダンスを開催します。
詳細は掲示やホームページ、学内放送にてお知らせしています。

開催予定日	開始時間	内容
11月14日㈫	午後２時30分	基本篇
11月21日㈫	午後２時30分	応用篇
12月１日㈮	午後２時30分	基本篇
12月８日㈮	午後２時30分	応用篇

＊所要時間は約60分です。集合場所は図書館１階カウンター、先着10名とさせていただきます。
＊開催の日時が変更になった場合は、図書館HPにてお知らせいたします。必ず事前に確認してください。

〈基本編〉
レポート作成に役立つ基本的な資料の探し方
〈応用編〉
卒業論文作成に役立つ資料の探し方

冬期休暇中の図書の館外貸出について

●通常の貸出手続きにより借り出している図書はすべて返却し、改めて冬期休暇中の館外貸出の手続きをしてください。手続きには利用者カード（学生証・職員証など利用証）が必要です。

手続期間
12月８日㈮～12月26日㈫
返却日
１月12日㈮　厳守

なお、図書館・総合研究室は、年明けの１月６日㈯、７日㈰、８日㈪に卒業論文提出直前のため特別開館します。

貸出冊数（通常貸出冊数と同じ）

科目等履修生・聴講生	５冊
文学部・短期大学部学生	10冊
大学院学生	
非常勤講師	
元教育職員・事務職員	
教育職員・事務職員	20冊

＊詳細、変更は掲示・ホームページにてお知らせします。

進路就職センター

進路就職センターは、進学や就職など、進路全般についての相談窓口です。学年を問わず気軽に相談してください。

■就職支援企画

―業界研究講演会―

2006年10月～12月開催（詳細は掲示や「学生向け情報提供システム」で確認してください）
さまざまな業界の動向や展望、仕事内容などについて、企業で活躍されている方々に講演していただきます。
（文学部第３学年、短期大学部第１学年、修士課程第１学年、博士後期課程第２学年を対象としていますが、希望する学生は学年を問わず参加してください）

■就職ガイダンス

―就職活動直前ガイダンス―

日時：2006年11月25日㈯・12月９日㈯　13：00～17：00　会場：2301教室

本格的に始まる就職活動をスムーズに行うために、準備や取り組みなど、“総まとめ”のガイダンスを開催します。

（文学部第３学年、短期大学部第１学年、修士課程第１学年、博士後期課程第２学年対象）

―ビジネスマナー・Uターンガイダンス―

日時：2006年11月23日㈭・祝）　10：00～16：30　会場：講堂

就職活動におけるマナーやリクルートファッション、Uターン就職にあたっての注意点を説明します。

スーツを着用し、ガイドブックを持参してください。

（文学部第３学年、短期大学部第１学年、修士課程第１学年、博士後期課程第２学年対象）

■就職活動報告会

日時：2006年12月６日㈬　16：30～18：30　会場：博綜館５階第１会議室

内定を得た卒業年次の学生に、どのように就職活動をしたのかを質問し、アドバイスを受けるチャンスです。今後の就職活動のためにも是非参加し、有益な情報をつかんでください。

（文学部第３学年、短期大学部第１学年、修士課程第１学年、博士後期課程第２学年対象）

■セールスポイント創造合宿

日程：2006年12月２日㈯～３日㈰　会場：湖西キャンパスセミナーハウス

本格的に始まる就職活動にむけて、自己PR・グループワーク・面接など実践的な取り組みを行います。９月に参加できなかった学生は是非参加してください。

申込期間　11月１日㈬～11月20日㈪　先着60名

参 加 費　3,500円

（文学部第３学年、短期大学部第１学年、修士課程第１学年、博士後期課程第２学年対象）

■警察官採用試験説明会

日時：2006年12月20日㈬　17：50～19：30　会場：2201教室（全学生対象）

2007年に実施される警察官採用試験について説明会を実施します。試験の動向や対策について情報収集できますので、将来警察官になりたいと思っている人は参加してください。

■講習について

２月に全学年を対象とした、マイクロソフト・オフィス・スペシャリスト講習や公務員受験特別講習を開講します。（詳細は、12月中旬に掲示や「学生向け情報提供システム」で確認してください）

教職支援センター

◇教職登録カードについて

教職登録カードは、教職を志す皆さんが、教職支援センターが実施しているさまざまな支援やリアルタイムな求人情報を得るために必要な書類です。教職を志しているが、まだ提出していない学生は教職支援センターに教職登録カードを直接提出してください。

◇教員受験特別講習（教職教養）の実施について

教員受験特別講習（教職教養・専門教養）を開講しています。教職教養（２回目）については、次のとおり開講いたします。是非受講してください。

（詳細は掲示や「学生向け情報提供システム」で確認してください）

講　師　高田　渉　先生

	日　程	時　間
2月	7㈬・8㈭・9㈮・13㈫・15㈭・16㈮	14：30～16：00
	20㈫・21㈬・22㈭・26㈪	
3月	5㈪・8㈭・9㈮・13㈫・14㈬・15㈭	
	20㈫・22㈭・27㈫・29㈭	

◇教員採用試験説明会

公立学校や私立学校の採用試験（日程・傾向・対策など）について説明します。教職を志す学生は必ず出席してください。

日　時　2007年１月16日㈫

場　所　J103教室

教育実習の経験を踏まえて

６月末までに、本学からは60名の教職希望者が教育実習を終えました。大半が３週間の実習でしたが、中には４週間の人もありました。たくさんの意義ある貴重な体験をした実習生が多かったようです。「指導の先生から、教育現場での学習指導や生徒指導の在り方、難しさを教えていただくとともに、教師としての教科の基礎知識、専門知識の重要性、教材研究の大切さ、さらには、生徒の心をどう把握するかなど、厳しく指導していただき、とても勉強になった。」との感想をたくさんいただきました。特に、生徒に教えるにはもっと深い知識を持っていなければ教師は務まらないと実感した人も多数いました。

今後教育実習を経て教員を目指している人は、これらの感想をしっかり受け止め、勉学にこれまで以上に励んでください。

公立学校教員採用試験終了

2007年度の教員採用試験の一次試験が、７月30日、徳島県の面接試験ですべて終了しました。その結果は、８月中に各受験者に知らされています。教職支援センターでは、受験対策として、直前に個人面接練習を取り入れました。面接試験に備えての準備不足のため、受け答えに戸惑いが多々見受けられました。受けてよかったとの感想を聞き、来年度以降も続けていく予定です。一次試験では、筆記試験と集団面接試験が主な内容です。二次試験では、論作文や模擬授業、個別面接が中心となっていますが、状況から面接対策がより重要となっています。社会の動きに敏感に反応し、自分の考えを持つため、常々情報収集を心掛けていきましょう。

学生相談室から

ズンタくんの気持ち

久保　聡史

大学生の頃、遊園地で着ぐるみのバイトをした。動物の服を着て、大きなアタマをかぶり、園内をうろうろするのだ。人気者の「ホワイトタイガー」を着ているときは、ちびっ子たちが喜んで抱きついてくる。しかし、古株でレトロな風体の「ゾウのズンタくん」のときは、やや集まりが悪い。遠くから女子中学生たちに「さびしそお～」などと言われたりしたが、違うキャラのなかに入ることで感じ得た不思議な体験であった。

いくつかの着ぐるみに入ることで「彼ら」の気持ちを感じさせられたが、普段私たちはお互い誰かの中に入ってみることはできないし、誰かの視点そのままを感じ取ることはできない。でも「あの人はこう思うに違いない」「この人はこう感じているだろう」と推測しながら生きている。それが「優しさ」や「思いやり」になったり、時には「偏見」や「決めつけ」になる。「相手の立場や気持ちになって考えるように」と幼い頃からさんざん言われてきたが、いくつになっても難しい。たとえば「自分はあの人にこう思われてるんじゃないか」と不安にかられるとき、相手の気持ちを推測はしているが、それが結果的に相手を「決めつけて」しまっていて、さらに自分をしばっていたりする。こんなことは日常的によくあるのではないだろうか。私はたまにある。そんなことも一緒に考えていければと思う。

（くぼ　さとし）

学生相談室の開室について

場　所	曜　日	相談室	学生相談員	相談日時
学生相談室（博綜館１階）	月曜日	1	谷口奈青理	10時30分～16時00分
		2		
	火曜日	1	西澤伸太郎	10時30分～16時00分
		2		
	水曜日	1	宇佐　晋一（神経科校医）	第２週・第４週 13時00分～16時00分
		2	佐賀枝夏文	10時30分～14時00分
	木曜日	1	譲　　西賢	10時30分～16時00分
		2		
	金曜日	1	久保　聡史	10時30分～16時00分
		2	菊岡　千夏	

谷大エリア散策

第25回　京都小山西花池郵便局さん

大学の東向かいの「京都小山西花池郵便局」を訪ね、局長の西村隆男さんにお話を伺いました。

現在の郵便局

―開局はいつ頃ですか

昭和３年５月21日に開局しました。当時は北大路通に面した、今の京都中央信用金庫さんあたりにあり、「京都中賀茂橋郵便局」という局名でした。

その頃賀茂川には北大路橋と少し北に中賀茂橋という橋がかかっていて、そこからついた名前です。住所はまだ上京区ですね。このあたりが北区になったのは昭和30年９月１日です。局は昭和38年11月11日に現在地に移り、昭和57年10月４日に改装して「京都小山西花池郵便局」という名称に変わりました。全国でも早い方でしたが改装時にATMを導入し、毎日長蛇の列ができて近畿地方で５本の指に入るほどの利用率でした。私は昭和46年７月１日から着任した５代目の局長です。

昔このあたりには著名な学者さんがたくさんお住まいになっておられたようです。三高の先生だった中村直勝さんがよく電報を打ちにみえました。とても美しい文字で書いておられたのを覚えています。また『広辞苑』を編纂された新村出さんのお孫さんで大谷大学で教鞭をとられていた新村祐一郎さんもよくお越しになりました。

移転時の仮局舎（写真提供：辻井正郎氏）

―大学のすぐ向かいなので、学生や教職員もよく利用させていただいています

大谷大学さんは昔から上得意さんですよ。はがきや切手をたくさん購入していただきまして、受験書類の取り扱いも多かったです。クラブの学生さんには今でもよく利用していただいています。ただ、今は大きな局が営業に回っていますし、宅配便の参入などで私達のような小さな局の仕事は少しずつ減っているのが現状で、残念ではあります。また、郵便為替だった受験料の納付が銀行振込になるなど、いろいろなシステムが大きく変わったことで、業務形態や内容も変わってきました。

局員のみなさん

―一番お忙しい時期は

学生さんが少なくなる夏休みはゆったりしていますが、それ以外の時期はずっと忙しく、特に毎月25日前後が慌ただしいです。昔はお客様とお話をする余裕と楽しさがありましたが、今は何よりも早くすることが求められますね。

―電子メールの普及による変化はありますか

昭和が終わった頃から、年賀はがきの売り上げがガタッと減りました。それから漢字を知らない人が増えたのではないでしょうか。就職用の企業宛の書類なのに「行」を「御中」に直していない学生さんとか、思わず訂正したくなる宛名書きもよく目にします。気が付いたときは声を掛けるようにしています。そのままだと面接を受ける前に落ちてしまいますよ。

―最近はいろいろな犯罪が多いのでご苦労されませんか

実はうちの局のお客様でも振り込め詐欺やリフォーム詐欺に遭われた方がおられます。おかしいと思い、「ご家族に確認されてからにしては」と何度もお引き止めしたのですが、ご高齢の方でお孫さんを心配なさるあまり、どうしても入金するとおっしゃって振り込まれてしまったこともあります。大変な世の中です。局にはいろいろな防犯グッズが置いてありますよ。お金ももちろん大切ですが、何よりもお客様の身に何かあっては大変です。それだけはなんとしても防止したいです。

―郵便局の利便性について

現在、全国には２万４千余りの郵便局があります。銀行は繁華街などに集中していますが、郵便局は住宅街の中にたくさんあるので高齢の方にも便利だと思います。また、近年は郵便以外にもいろいろなサービスをしています。全国のおいしいものを取り寄せられるグルメ便やお中元・お歳暮など、お出かけにならなくてもご利用いただけます。この仕事をしていて、お客様に「急な入院で保険が役に立った。入っていてよかった」など、役に立ったと言われることが一番嬉しいです。日本ほど郵便制度の整った国は他にありませんよ。海外便の不着の調査を他国に依頼しても、初めから断られることも少なくありません。民営化で今後どのように変わるのかわかりませんが、便利さは変えることなく、皆さんにもっと郵便局を利用していただきたいですね。

―ありがとうございました

市電と郵便局（写真提供：多野久勝氏）

写真でふりかえる
大谷大学今昔

帰学記念講演

鈴木大拙　没後四十年記念展

英訳『教行信証』の完成を報告する鈴木大拙

大谷大学と鈴木大拙

佐々木　令信

鈴木大拙が真宗大谷大学教授に就任したのは、大正十年（一九二一）、五十一歳の時であった。学習院大学の大拙を迎えるにあたっては、西田幾多郎のはたらきかけとともに、佐々木月樵とのつながりがあった。大拙と月樵は明治四十四年（一九一一）には英訳『御伝鈔』を共訳刊行している。

その頃の大谷大学は、月樵のほか南条文雄、曽我量深、金子大栄、赤沼智善、山辺習学などの清沢満之の流れを汲んだ真宗学、仏教学や戸坂潤、朝永三郎などをはじめ、各分野で充実したスタッフを擁していた。

大拙は着任後、イースタン・ブディスト・ソサエティ（東方仏教徒協会）を組織し、発足させた。それは、東洋の大乗仏教の思想をひろく諸外国に紹介し発信するための足場となった。それは、大正十四年（一九二五）の月樵による「大谷大学樹立の精神」の前提となるものであったろう。

月樵が大正十五年（一九二六）に急逝し、大学葬が講堂で行われたが、大拙は教授代表として弔辞を読んだ。弔辞が終わりにさしかかったころ「…自分は、君の知遇を恩に感じて京都へ来たのであったが」と言ったところで、こみあげるものに耐えきれずに絶句し、嗚咽してしまったという。二人の信頼関係がしのばれる。

欧米の研究者の大きな注目を集め、世界的な宗教学者として海外で著名となって以降、大拙は大乗仏教を世界に発信することで世界的に活躍することとなる。昭和九年（一九三四）には『楞伽経の研究』により大谷大学より文学博士号が授与され、昭和二十四年（一九四九）には、学士院会員に列せられ文化勲章を受けた。また、八十歳となった昭和二十五年（一九五〇）以降、八十八歳までは海外での講義を続けた。

昭和三十三年（一九五八）に帰国した大拙は、十二月九日帰学記念講演「現世界思潮と仏教」を大谷大学講堂で行ったが、その時、九十歳頌寿記念論文集の話がもちあがり、のち、執筆者として国外では、P・ティリッヒ、A・トインビーなどの十七篇、国内では宇井伯寿、宮本正尊、久松真一、有賀鉄太郎、山口益などの十九篇からなる世界的交流の只中に存在していたことを物語る『仏教と文化』の刊行をみた。

昭和三十六年（一九六一）東本願寺から親鸞聖人七百年御遠忌にあたって、『教行信証』の英訳の委嘱をうけ、心血を注ぎ完成させた。その際に、曽我量深、金子大栄との対談が、西谷啓治の司会で企画され、その記録が『親鸞の世界』（東本願寺出版部）として刊行されている。そこには、真宗教学上の重要な問題の理解が、大拙のかざらないまっすぐな人柄とともに示されており貴重である。

昭和四十一年（一九六六）七月十二日早朝、秘書岡村美穂子氏が付き添うなか、腸閉塞で東京の聖路加国際病院で還浄した。九十六歳で実に静かな人生の終焉を迎えられた、と主治医日野原重明氏はいう。

当日のＮＨＫでは「日本の伝統」という番組が予定されていた午後十一時十分からの三十分枠を急遽差し替え、増谷文雄らの出演のもと「鈴木大拙さんをしのぶ」という追悼番組が放映された。世界的碩学を失った反響の大きさは、現在の私たちが想像する以上のものであったといえるだろう。

それから四十年が経った。大拙の学問や言葉は、仏教の理解に基づいたその人格と不可分のものとして私たちに迫ってくる。現在の学は、人格から離れた学智に埋め尽くされてはいないだろうか。

現在、大谷大学博物館では、今年度の特別展として〈鈴木大拙没後四十年記念展〉『大拙　その人と学問』を開催している。

（ささき　れいしん　教授　日本仏教史）

研究室だより

総合研究室から

11月、12月の研究室の開室は以下のとおりです。宗教行事、学園祭等により変則的な開室日もあるので、注意してください。2007年は１月９日㈫から**平常開室**します。

なお、開室日や開室時間の変更は、ホームページ、学内掲示板に掲載します。確認してください。

11月	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	※1 10	11
	12	13	14	15	16	17	※2 18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	※3 27	※4 28	29	30		

12月	日	月	火	水	木	金	土
						1	2
	※5 3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31						

トピックス！

2007年

１月６日㈯
１月７日㈰
１月８日㈪

上記３日間は卒業論文提出締切日直前のため総合研究室・図書館は**特別開室**を行います。

開室時間
10時－17時30分

濃い黄字は、響流館の休館日。
薄い黄字は、10時開室　17時30分閉室
黒字は、９時開室　19時30分閉室

※１　学園祭期間中（11月10日－13日）は、日曜日を除き、土曜日扱いの開室（10時－17時30分）とします。
※２　公募制推薦入試期間（11月18日－19日）
※３　11月27日は大学報恩講のため、**開室は13時**、閉室は19時30分です。
※４　11月28日は宗祖御正忌のため、閉室です。
※５　12月３日・10日の日曜日は、修士論文提出締切日間近のため特別開室します。

幼児教育保育科研究室から

○幼児教育科第２学年は『卒業研究』を２部作成し、１部を教務部に、もう１部（コピー可）は一般研究室に提出してください。提出締切は11月30日㈭午後４時【厳守】です。なお、題目変更届及びワープロ書式所定外作成届は、11月22日㈬午後５時までです。

○本年度提出された『卒業研究』の発表会を１月10日㈬第５・６時限（午後４時10分～７時20分）に開催します。授業の一環として開催しますので、第１・２学年とも全員出席してください。会場はメディアホール（響流館３階）です。詳細は後日２号館１階の幼児教育保育科掲示板及び各ゼミ教員からお知らせします。

○〈幼教フェスティバル2006〉を12月17日㈰に開催します。器楽合奏･ダンス･劇など学生自身による手作りの発表会です。午前の部は11時から12時まで、午後の部は２時からの予定です。詳細は後日幼児教育保育科掲示板でお知らせします。

○現在、幼児教育保育科一般研究室の図書を借りている人は、１月16日㈫までに返却してください。

勉強会のお知らせ

総合研究室では、任期制助手による読書会・勉強会が開催されています。参加希望者は担当者まで

1	『観経四帖疏』輪読会
2	学科・学年不問
3	毎週火曜４限
4	斉藤（真宗学）
5	総合研究室の斉藤まで
6	善導の『観経四帖疏』を輪読します。善導の著作に親しむことを目的とします。テキストは『真宗聖教全書』第一巻です。

1	『和語燈録』輪読会
2	学科・学年不問
3	毎週月曜２限
4	義盛（真宗学）
5	総合研究室の義盛まで
6	法然上人の『和語燈録』を輪読します。テキストは『真宗聖教全書』第四巻です。

1	哲学科英語読書会
2	大学院進学希望者
3	毎週土曜日 午後１時から２時すぎまで
4	神崎（倫理学）
5	総合研究室の神崎まで
6	哲学関連の文章を英語で読むのに慣れるのが目的です。テキストはこちらで用意します。

1	哲学科英語勉強会
2	哲学科の学部生
3	毎週火曜日 午後４時から５時頃まで
4	神崎（倫理学）
5	総合研究室の神崎まで
6	哲学科の授業で必要とされる程度の英語を読むことに慣れることを目的とします。教材はこちらで用意します。

1	哲学科ドイツ語勉強会
2	大学院進学希望者
3	毎週火曜日 午後１時から
4	若見（哲学）
5	総合研究室の若見まで
6	テキストは、Johannes Hirschberger, Geschichte der Philosophie, Band I: Altertum und Mittelalterで、邦訳は『西洋哲学史Ⅱ 中世』ヒルシュベルガー著、高橋憲一訳、理想社、です。文法を確認しつつ進めています。

1	修士課程・博士後期課程入学試験（春季）英語対策
2	修士課程もしくは博士後期課程入学試験（春季）受験を予定、英語問題を選択しようと考えている人
3	参加者の希望を聞いた上でスケジュールを決定します。
4	三浦（イギリス文学）
5	総合研究室の三浦まで
6	各参加者の希望により、 修士課程：「外国語」（各専攻共通）英語 博士後期課程：「外国語」（各専攻共通）英語 の過去問を解く練習をします。 （尚、国際文化専攻の方は、申し出て頂ければ「専門」の英語文献読解問題にも対応いたします）

1	ドイツ語文法勉強会（継続）
2	初級者（アルファベットが発音できる程度でかまいません）
3	参加者と相談のうえ決定
4	廣川（ドイツ文学）
5	総合研究室の廣川まで
6	ドイツ語の基礎知識が急に必要になった学生のためのクラスです。もちろん初級文法を学びたい方も歓迎します。なお、教材はコピーを配布します。

1　会の名称
2　参加対象
3　日程・時間
4　担当者名
5　連絡先
6　主旨・概要

※一部の読書会、研究会は演習室で開催しています。

学会だより

真宗学会

真宗学会大会

開催日　11月９日㈭　15時から
・講　師　木越　康　助教授
　講　題　真宗教学の近代化と現代「真宗」学の課題
・講　師　島薗　進　東京大学大学院教授
　講　題　近代の「宗教」観と現代宗教学の課題
　場　所　響流館３階メディアホール

鸞音忌法要及び記念講演会（真宗学会後援）

開催日　11月14日㈫　13時から
講　師　宗　正元氏
講　題　未定
場　所　未定

第4回真宗学会例会

開催日　11月15日㈬　14時30分から16時
講　師　井上　尚実　専任講師
講　題　未定
場　所　尋源講堂

修士論文中間発表会

開催日　11月中旬
詳細は後日掲示にてお知らせします。

卒業論文中間発表会

開催日　12月中旬
詳細は後日掲示にてお知らせします。

第５回真宗学会例会

開催日　12月13日㈬　14時30分から16時
発表者　藤元　雅文　任期制助手
　　小笠原　智秀
　　（博士後期課程第３学年）
　　林　　龍太
　　（博士後期課程第３学年）
場　所　尋源講堂

卒業論文梗概発表会並びに送別懇談会

開催日　１月中旬
詳細は後日掲示にてお知らせします。

哲学会

秋季研究会

開催日　11月29日㈬　16時10分から
発表者　若見　理江　任期制助手
場　所　響流館３階
　　マルチメディア演習室

仏教学会

公開講演会

開催日　12月上旬
詳細は後日掲示にてお知らせします。

研究発表例会

開催日　12月21日㈭　16時10分から
発表者　山野　俊郎　助教授

英文学会

年次大会

開催日　11月30日㈭　16時10分から
講　師　宮川　清司　教授
講　題　未定
場　所　未定

出版物紹介

『院政期以後の歌学書と歌枕
ー享受史的視点からー』
赤瀬知子　著
清文堂　刊
（2006.10）418頁

『唐 復礼撰　十門弁惑論　注解』
一色順心　編
平楽寺書店　刊
（2006.6）260頁

『Rennyo and the Roots of Modern Japanese Buddhism』
安冨信哉、Mark L.Blum　編
寺川俊昭、訓覇曄雄、安冨信哉、松村尚子、草野顕之、加来雄之、池田勇諦　分担執筆
Oxford University Press　刊
（2006.1）298頁
※詳細は本誌13頁参照

『仏教社会福祉辞典』
日本仏教社会福祉学会　編
吉元信行、佐賀枝夏文、山下憲昭、宇治谷義雄、柏原信行、近藤祐昭、田代俊孝、智谷公和　分担執筆
法藏館　刊
（2006.3）369頁

『人と生きる力を育てる
～幼児期からの集団づくり～』
全国保育問題研究協議会　編
射場美恵子　分担執筆
新読書社　刊
（2006.6）234頁

『日本古典への誘い100選Ⅰ』
佐藤義寛　分担執筆
東京書籍　刊
（2006.9）447頁

『アフリカ系アメリカ人
ハンディ事典』
松本昇ほか　編
古川哲史　分担執筆
南雲堂フェニックス　刊
（2006.10）400頁

「大谷大学広報06ー冬」発行のお知らせ
「大谷大学広報06－冬」の発行を来年１月に予定しています。さまざまなエッセイや連絡事項などを掲載する予定です。ぜひお読みください。広報は次の場所に置いてありますので、ご自由にお取りください。
①博綜館ピロティー（博綜館入口横）　②至誠館（学生課カウンター前）　③響流館（教育研究支援課カウンター横）　④学内食堂　⑤各研究室　⑥１号館１階　⑦２号館１階
また、大谷大学ホームページから、バックナンバーを含め広報の閲覧が可能です。
http://www.otani.ac.jp/annai/shuppan/d_kouhou.html

大谷中学校・高等学校からのお知らせ

■大谷中学・高等学校学園祭便り

中学校－本中学校が一番燃え上がりクラスもまとまるのが演劇コンクールで、各クラスは６月中旬より準備に入り、夏休み後半から稽古をはじめたようです。

演劇コンクール結果　９月13日㈬～15日㈮に実施

最優秀賞　－　Ⅲ－１組『ガラスの靴を脱ぎ捨てないで』

優秀賞　－　Ⅲ－４組『地球は大きなホスピタル』

特別賞　Ⅰ－２組『屋根裏チュウ学校』
　　Ⅱ－３組『おとぎの国のアリス』

高等学校－９月17日㈰に実施（外部入場者数は、約2,800名）

京都私学の中で、最高の入場者数を記録している本校の学園祭が、今年も実施されました。校舎の建設工事で十分なスペースを確保できない中で、各クラスはそれぞれ趣向をこらして頑張り、中でもステージ発表は一番の見ものであった、と生徒たちは口々に感想を述べていました。

■二学期の主な行事

10月４日㈬	高校１年生対象の性教育講演会
10月７日㈯	中学校体育大会（雨天なら９日に延期）、高校は９月20日㈬に実施済み。
10月13日㈮	第３回今熊野セミナー
10月18日㈬	高校２年生対象の性教育講演会
10月21日㈯	高校１年生、進路体験デー
11月22日㈬	報恩講
11月29日㈬	高校３年生対象の性教育講演会
12月４日㈪	第４回今熊野セミナー

■来年度（2007年）入試について

※大谷大学広報の前号に記載されていました大谷中学校の入試日程が、一部変更になりましたので、お知らせいたします。

変更点　－　B日程試験のB２入試は、１月24日㈬に実施することに決定。

B２入試
- 試験内容　作文・面接（個人面接とグループ面接の２つ）・書類審査
  小学校５年生と６年生の成績
- 合格発表は、１月26日㈮の午前９時に校内に掲示。

■オープンキャンパスのお知らせ（入試相談も実施）

		中学校の部	高等学校の部
第４回オープンキャンパス	11月18日	午後１：30～４：30	午前９：30～12：30
第５回オープンキャンパス	12月９日	午前９：30～12：30	午後１：30～４：30

九州大谷短期大学からのお知らせ

■2006年度　入学試験要項

１．募集学科・定員
〔全学科 男女共学〕

●仏教学科　10名

●表現学科　50名
　演劇放送フィールド
　情報司書フィールド

●幼児教育学科　100名
　幼児教育コース
　児童福祉・心理コース

●福祉学科　50名

２．入試日程

入試区分	出願期間	試験日・会場		合格発表
公募推薦 自己推薦 社会人 長期履修 （第１次募集）	10月25日㈬ ～ 11月６日㈪	11月10日㈮	本学	11月17日㈮
		11月９日㈬	北九州・佐世保 大分・鹿児島	
公募推薦 自己推薦 （第２次募集）	12月11日㈪ ～ 12月19日㈫	12月25日㈪	本学	12月27日㈬
一般入試A 社会人 長期履修 （第２次募集）	１月22日㈪ ～ １月31日㈬	２月３日㈯	本学	２月８日㈭
一般入試B 社会人 長期履修 （第３次募集）	２月19日㈪ ～ ２月28日㈬	３月５日㈪	本学	３月９㈮
一般入試C 社会人 長期履修 （第４次募集）	３月19日㈪ ～ ３月27日㈫	３月28日㈬	本学	３月29日㈭

３．入試科目

入試区分	学科	科目
公募推薦　自己推薦　一般入試	全学科	①作文　②面接
社会人入試　長期履修生入試	全学科	①面接

■保育士資格取得者対象

１．募集学科・定員〔男女共学〕
●専攻科・福祉専攻　30名

３．入試科目　①作文　②面接

２．入試日程

	出願期間	試験日	選考会場・日程	合格発表
第２次募集	2007年１月22日㈪ ～１月31日㈬〈必着〉	２月３日㈯	本学 作文 ９：00～10：00 面接 10：10～	2007年 ２月８日㈭
第３次募集	2007年２月19日㈪ ～２月28日㈬〈必着〉	３月５日㈪		2007年 ３月９日㈮
第４次募集	2007年３月19日㈪ ～３月27日㈫〈必着〉	３月28日㈬		2007年 ３月29日㈭

詳しくは九州大谷短期大学広報室（TEL 0942-53-9900）へ、お問い合せ下さい。

話題の広場 SQUARE

世界人、大拙の英文の墨跡

礪波　護

絵　内山智廣

大谷大学博物館は、今年度の特別展として〈鈴木大拙没後四十年記念展〉『大拙　その人と学問』を開催している。本名の貞太郎より居士号の大拙で知られる鈴木は、1870年に金沢で生まれ、鎌倉での参禅期と12年にもわたる米英での長期滞在を経て、大乗仏教を世界に発信した仏教学者である。

大拙は大谷大学には1921年に、学習院大学教授の職を辞して、ビアトリス夫人とともに赴任し、90歳まで40年間にわたって教授をつとめた。当時の二代学長南条文雄は、漢訳大蔵経の目録を欧米人にわかるように英文で解説した、いわゆるNanjio Catalogueを1883年にオックスフォードで出版した世界的な仏教学者で、日本で最初の文学博士である。破格の待遇で本学に迎えられた大拙は、着任の翌月に英文仏教雑誌『イースタン・ブディスト』を創刊し、毎号のように英文による文章を執筆した。1966年７月12日に東京の聖路加国際病院で没した。40年前のことである。

私が大拙の名を初めて知ったのは高校生のころである。英語の授業が話題になったとき、1923年に大谷大学の予科に入学した父が、二人のすばらしい先生から英語を習ったのを自慢した。一人は矢野峰人で、スティーヴンソンの小説『宝島』を習ったこと、もう一人が大拙で、夫人がアメリカ人である英語の達人で、夢も英語でみられたそうだ、というのを聞き、感心したことを思い出す。

久松真一・山口益・古田紹欽編『鈴木大拙―人と思想―』（岩波書店、1971年）に所収の矢野の思い出によると、大拙と同日付けで大谷大学教授になった矢野は、台北帝国大学の新設に参画して赴任し、20年後に敗戦によって京都に引き揚げて、同志社大学の教授となり、昔の縁故で本学には非常勤講師として英語を教えた。矢野は同志社の韓国人学生から、出資者があるので国際間の思想交流を目的とする雑誌を出したいので、大拙と一緒に顧問となってほしい、と頼まれる。

矢野の話を聞いた大拙は大変な乗り気で「名は『世界人』としよう」という。タイトルを英語で何とするか、The Citizen of the Worldはどうも長すぎるのではと矢野がいうと、大拙は「World-Citizenとしたらよかろう」と答え、「そんな英語がありますか」と念を押されても、「なに、なければ造ったらよいのだ、それでいこう」となり、雑誌『世界人』は1948年２月に創刊された。創刊の辞は矢野が書き、大拙が巻頭論文を執筆した。「世界人」World-Citizenの名こそ、いかにも大拙自身にふさわしい、といえよう。

古田紹欽編『鈴木大拙遺墨』（読売新聞社、1973年）をひもといても、大拙の墨跡は、個性ゆたかな漢字・漢文なので、時のたつのを忘れる。漢文ばかりでなく、時に毛筆で書かれた英文も、文意を考えさせ、私は好きである。「To do good is my religion. The world is my home（善をなすのがわたしの宗教である。世界はわたしの家である）」など、世界人―大拙の面目躍如である。

私が大拙の講演を聴いたのは、親鸞聖人七百回御遠忌の記念行事のひとつとして京都会館で開かれた講演会の一度だけであるが、その際に90歳の大拙の介添えをしたのが、秘書の岡村美穂子さんであった。今回の本学の巡回展では、岡村さん所蔵の遺品を図書館入口脇に陳列しているが、真っ先に「O wonderful, wonderful, and most wonderful wonderful! and yet again wonderful…」と墨筆で書かれた軸装が掛けられている。この文章はシェイクスピア『お気に召すまま』の第三幕第二場のセリフである。この句は晩年の大拙が東洋的なるものの真髄をあらわしているとした漢字「妙」にあたるそうだ。漢字で揮毫された「妙用」の扁額も同時に展示されている。

博物館には、大拙と出会った年のビアトリスからの手書きのラブレターが封筒とともに陳列されている。「Dearest dearest Tei（最愛なる最愛なる貞さま）」で始まる。ちなみに貞太郎は、太郎とあるので長男と思われがちだが、実は『易経』冒頭の、「元亨利貞」にもとづいて命名され、長男は元太郎、貞太郎は四男であった。

大拙の最後のことばは、「No nothing. Thank you.」だったそうである。Thank youを添え忘れなかったことこそ、英語で夢をみたという大拙のイメージに合致する。

（となみ　まもる　教授　東洋史学）